

一般国道 18 号 (野尻バイパス)
埋蔵文化財発掘調査報告書 5

—信濃町内その 5—

おお みち した
大 道 下 遺 跡

し みず ひがし
清 水 東 遺 跡

2013.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

一般国道 18 号（野尻バイパス）
埋蔵文化財発掘調査報告書 5

—信濃町内その 5—

お^おみ^{みち}した^{した} 遺 跡
大 道 下

し^しみ^{みず}ひがし^{ひがし} 遺 跡
清 水 東

2013.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

はじめに

信濃町は黒姫、妙高、飯縄、斑尾の山々に囲まれ、野尻湖という美しい湖を有する高原にあり、多くの観光客が訪れます。また、野尻湖は野尻湖発掘調査団によって継続されている全国から参加者が集まる発掘調査でも知られています。1962年から3年に一度おこなわれている発掘調査は、昨年の3月で19回目を迎えました。ナウマンゾウやオオツノジカなどを狩った人びとの生活の様子や当時の自然環境の復元に大きな成果をあげています。また、湖底の立が鼻遺跡だけではなく、湖の南西岸の丘陵地帯には多くの旧石器時代から縄文時代草創期までの遺跡が密集しており、野尻湖遺跡群として知られているところです。

当センターにおきましても信濃町を縦断する上信越自動車道の建設工事に先立ち、1993年から1995年にかけて日向林B遺跡、貫ノ木遺跡ほか12遺跡の調査を実施しました。また、2001年に県道古間停車場線拡幅工事に伴う吹野原A遺跡の調査をおこないました。本事業に関わる一般国道18号野尻バイパス建設に伴う発掘調査は1993年から1995年の貫ノ木遺跡、1999年から2002年にかけての貫ノ木遺跡、照月台遺跡、仲町遺跡、川久保遺跡で実施されています。いずれの遺跡についても整理作業を経て発掘調査報告書の刊行を終えています。その中には2011年に国の重要文化財に指定された日向林B遺跡出土品をはじめとする、重要な発見がいくつもありました。

本書では、既設の国道18号野尻バイパスの南、古間・穂波地区に新たに事業化された区間内に所在する大道下遺跡、清水東遺跡の調査成果を掲載しております。信濃町内で当センターの調査が始まって20年近くとなります。上信越自動車道関連事業の報告書ほかとあわせて御活用いただければ幸いです。

最後となりましたが、発掘作業から本書刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた国土交通省、信濃町、信濃町教育委員会などの関係機関、地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業に御協力いただいた多くの方々に対し感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は長野県上水内郡信濃町に所在する大道下遺跡と清水東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は一般国道18号野尻バイパス改築工事に伴う事前調査として実施し、国土交通省関東地方整備局からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 上記遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』28ほかで紹介している。内容において本書と相違がある場合は、本書の記述の方が優先する。
4. 本書に掲載した地図は、国土交通省関東地方整備局長野国道事務所作成の国道18号野尻バイパス平面図、国土地理院発行の5万分の1地図および数値地図25000を使用した。
5. 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点（第Ⅷ系、 $X=0.0000$ [北緯 $36^{\circ} 0' 00''$]、 $Y=0.0000$ [東経 $138^{\circ} 30' 00''$])を基準点としている。なお、この測地系は2002年以降の世界測地系（新測地系）である。
6. 本書の執筆分担は以下のとおりである。編集は谷和隆がおこない、岡村秀雄が校閲し、大竹憲昭が総括した。
第2章、第3章第1節、第3章第2節、第4章第1節、第4章第2節：市川桂子
上記以外：谷和隆
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご指導・御協力を得た。御芳名を記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）
中村由克、渡辺哲也、信濃町教育委員会、信濃町建設水道課

凡 例

1. 本書に掲載した遺物写真はすべて1：1のスケールとなっている。
2. 土層・遺物の色調は「新版 標準土色帖」による。

目次

はじめに.....	i	第2章 遺跡の位置と環境	
例言.....	ii	第1節 地理的環境.....	11
凡例.....	iii	第2節 歴史的環境.....	13
目次.....	iii	第3章 大道下遺跡	
挿図目次.....	iii	第1節 調査の方法.....	21
挿表目次.....	iii	第2節 層序.....	21
		第3節 遺構.....	24
		第4節 遺物.....	27
第1章 発掘調査の経緯と方法		第4章 清水東遺跡	
第1節 発掘調査の経緯と調査経過.....	1	第1節 調査の方法.....	28
1 調査に至る経緯.....	1	第2節 層序.....	28
2 発掘作業と整理作業の経過.....	2	第5章 総括.....	33
3 調査体制.....	7	引用参考文献.....	33
4 調査日誌抄.....	7	写真図版	
第2節 発掘調査の方法.....	9	報告書抄録	
1 発掘作業の方法.....	9		
2 整理作業の方法.....	10		
3 遺物と記録の収納.....	10		

挿図目次

第1図 調査区と遺跡範囲.....	3	第8図 野尻湖編年.....	17
第2図 大道下遺跡の調査範囲.....	4	第9図 大道下遺跡の層序.....	23
第3図 清水東遺跡の調査範囲.....	5	第10図 SK1・SK2 平面図.....	25
第4図 大道下遺跡のテストピット及び面的調査区配置状況.....	6	第11図 SK1・SK2 断面図.....	26
第5図 清水東遺跡のトレンチ及びテストピット配置状況.....	8	第12図 清水東遺跡の層序.....	30
第6図 遺跡の位置.....	12		
第7図 伊達町の遺跡分布図.....	14		

挿表目次

第1表 調査体制.....	7	第3表 信濃町の遺跡調査の歴史1.....	19
第2表 信濃町の遺跡一覧.....	15	第4表 信濃町の遺跡調査の歴史2.....	20

写真図版

PL1 大道下遺跡の遺景・調査風景	PL5 大道下遺跡の遺物
PL2 大道下遺跡のテストピットの配置と断面	PL6 清水東遺跡の遺景・調査風景
PL3 大道下遺跡のテストピットの断面と遺構	PL7 清水東遺跡のテストピットの断面
PL4 大道下遺跡の遺構と遺物	

第1章 発掘調査の経緯と方法

第1節 発掘調査の経緯と調査経過

1 調査に至る経緯

人道下遺跡は長野県上水内郡信濃町大字穂波に、清水東遺跡は同町大字古間に所在する。群馬県高崎市から新潟県上越市に至る国道18号は信濃町を南北に貫き、両遺跡の他に野尻湖西側に位置する多くの遺跡を通っている。夏期観光シーズンの渋滞解消と、上信越自動車道開通に伴う交通量の増加に対応するため、平成元年(1989年)に「国道18号野尻バイパス」と称されるバイパス工事が事業化された。建設省関東地方建設局(中央省庁統廃合に伴い平成13年1月6日に国土交通省関東地方整備局となる)と長野県教育委員会、信濃町教育委員会との協議により、野尻バイパスの新設及び拡幅部分の周知の埋蔵文化財包蔵地は、記録保存がおこなわれることとなった。平成6～7年(1994～1995年)に貫ノ木遺跡、西岡A遺跡、平成11～14年(1999～2002年)に貫ノ木遺跡、照月台遺跡、仲町遺跡、川久保遺跡の発掘調査が財団法人長野県埋蔵文化財センター(組織改編により平成10年度から財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターとなる。以下両者を長野県埋蔵文化財センターと記す)により実施された。いずれの遺跡も発掘調査報告書が刊行され記録保存が完了している。

平成21年8月に大道下遺跡と清水東遺跡の一部を含む全長約1kmの路線について道路拡幅工事が計画されていることが土木工事を伴う公共事業照会により把握される。平成21年12月10日に国土交通省関東地方整備局、信濃町建設係、長野県教育委員会、信濃町教育委員会による遺跡の保護協議がおこなわれた。その結果、大道下遺跡と清水東遺跡の事業地内の周知の埋蔵文化財包蔵地範囲の記録保存のための発掘調査を国土交通省関東地方整備局が信濃町教育委員会に委託しておこなう方針となった。また、両遺跡間の周知の埋蔵文化財包蔵地外について、信濃町教育委員会が試掘調査をして埋蔵文化財包蔵地の有無を確認することとなった。

平成22年度に国土交通省関東地方整備局と信濃町教育委員会との間で発掘調査及び試掘調査の協議が進められ、発掘調査及び試掘調査は平成23年度に実施する方向となった。

平成22年11月8日に国土交通省関東地方整備局、長野県教育委員会、信濃町教育委員会の3者協議が実施された。試掘調査により埋蔵文化財が発見された場合、1万㎡以上の調査規模が予測され、信濃町教育委員会の体制では受託が難しいことから、本調査については長野県埋蔵文化財センターが受託してほしいとの要望があった。長野県教育委員会は大道下遺跡、清水東遺跡の発掘調査についても、長野県埋蔵文化財センターが受託する方向で検討することとした。平成22年12月22日には、長野県埋蔵文化財センターを加えた4者協議がおこなわれ、平成23年度に大道下遺跡と清水東遺跡の発掘調査を長野県埋蔵文化財センターが受託することが決められた。また、町の試掘調査により新たな埋蔵文化財包蔵地が発見された場合は平成24年度に長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を受託することが確認された。

長野県埋蔵文化財センターは平成23年6月14日付けで大道下遺跡と清水東遺跡の文化財保護法第92条に基づく『埋蔵文化財発掘調査の届出書』を提出し(23長埋第3-7号[大道下遺跡]、23長埋第3-8号[清水東遺跡])、長野県教育委員会は平成23年6月28日付けで、発掘調査の実施を通知した(『埋蔵文化財

の発掘調査について』23 教文第 6-9 号〔大道下遺跡〕、23 教文第 6-10 号〔清水東遺跡〕）。

発掘調査の受委託契約にあたり、平成 23 年 7 月 1 日に国土交通省関東地方整備局、長野県教育委員会、長野県文化振興事業団の 3 者協定を締結した（『一般国道 18 号（野尻バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書』）。これに基づき、同日付けで国土交通省関東地方整備局と財団法人長野県文化振興事業団は発掘調査受委託契約を締結した。

2 発掘作業と整理事業の経過

(1) 発掘作業

大道下遺跡と清水東遺跡の発掘作業は並行して 2 か月間実施された。第 1 図に調査区と遺跡範囲を、第 2 図に大道下遺跡の調査範囲、第 3 図に清水東遺跡の調査範囲を示した。調査期間と調査面積は以下のとおりである。

大道下遺跡 平成 23 年 8 月 1 日～9 月 30 日 510 m²

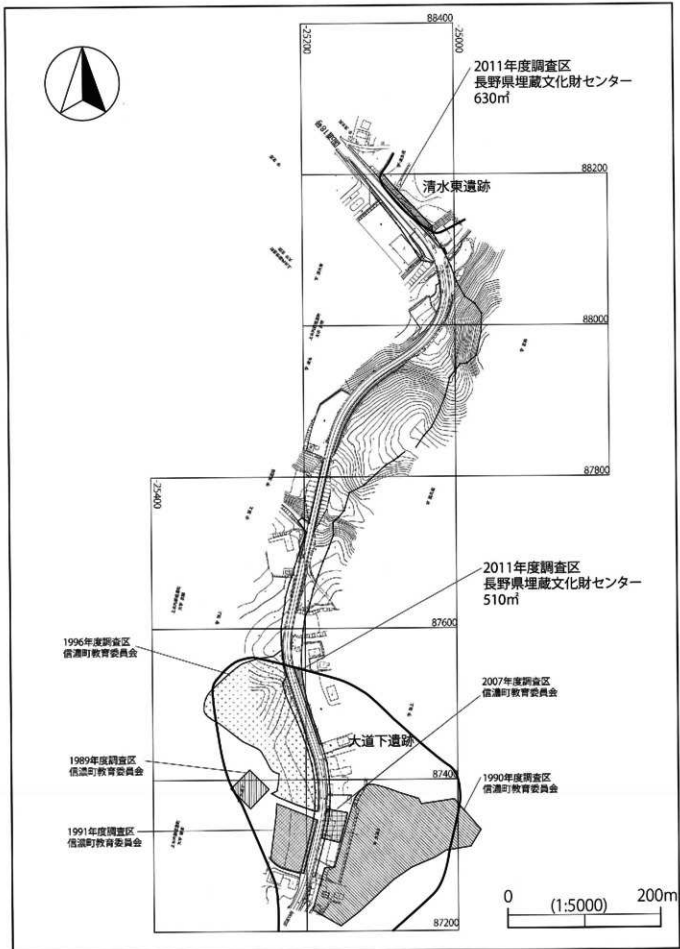
清水東遺跡 平成 23 年 8 月 1 日～9 月 30 日 630 m²

国道東側の約 100m の区間が大道下遺跡の調査区となる。調査区の大部分は飲食店の駐車場として利用されていた。この飲食店は調査期間中も営業を継続しており、飲食店駐車場への大型車両が通行可能な幅の進入路が調査区内 3 か所を横断していた。また、調査区内 4 か所に使用中の大型電柱が設置されていた。調査区南端から約 60m の区間の調査区幅は約 3m となっている。大型車両の交通量の多い国道に面しているため、通常以上に安全勾配や、防護フェンス等の敷地を確保する必要もあったことから、遺構面の調査区幅は 1m 程度しか確保できないことが予想された。そこで、この幅の狭い区間については、1m × 2m のテストピットを一定間隔で設定し、遺構・遺物分布の広がりを確認することとした。使用中の進入路と電柱を避けて 5 か所のテストピットを設定した（第 4 図）。

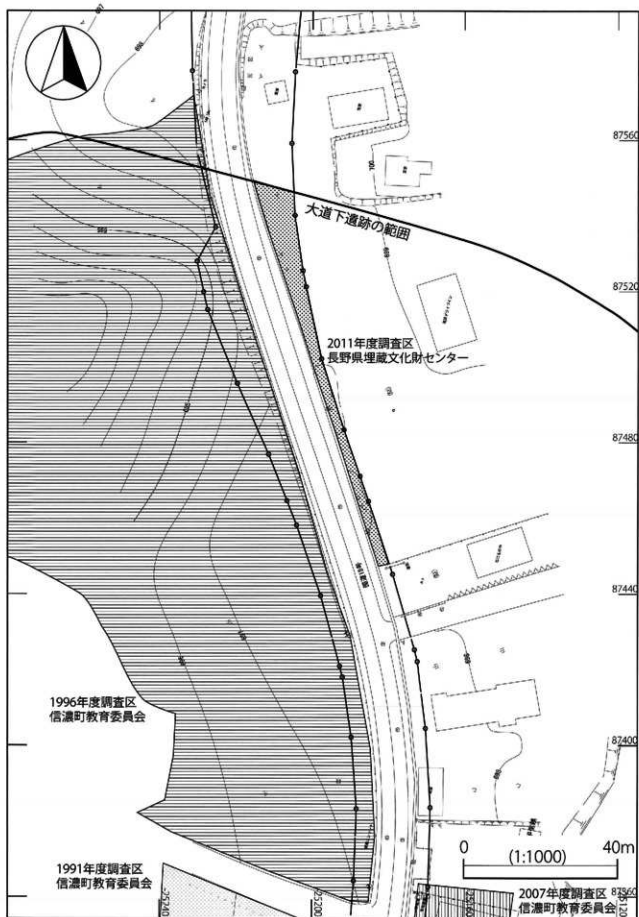
テストピットは駐車場造成上となる表土を重機で掘削し、その下部を人力で掘り下げた。すべてのテストピットで造成はローム層まで達しており、縄文時代以降の遺構・遺物包含層は失われていた⁽⁹¹⁾。造成土中から数片の土器片が検出されたが、遺構は確認できなかった。ローム層中での旧石器時代の石器も検出されなかった。これらの結果より、テストピット周囲に遺構、遺物分布は広がらないと判断をし、テストピットの拡幅はおこなわないこととした。

調査区北側の最大調査区幅は 9m 程度あったことから、進入路と電柱を避けて面的な調査をおこなうこととした（第 4 図、面的調査区）。面的調査区は重機でローム層漸移層まで掘削をおこなった後、人力で精査をおこない遺構検出をおこなった。その後、ローム層中の旧石器時代遺物の有無を探るため、面的調査区内に 1m × 2m のテストピット 8 か所（TP6～13）を設定し、人力でローム層を掘り下げたが、遺構・遺物は検出されなかった。

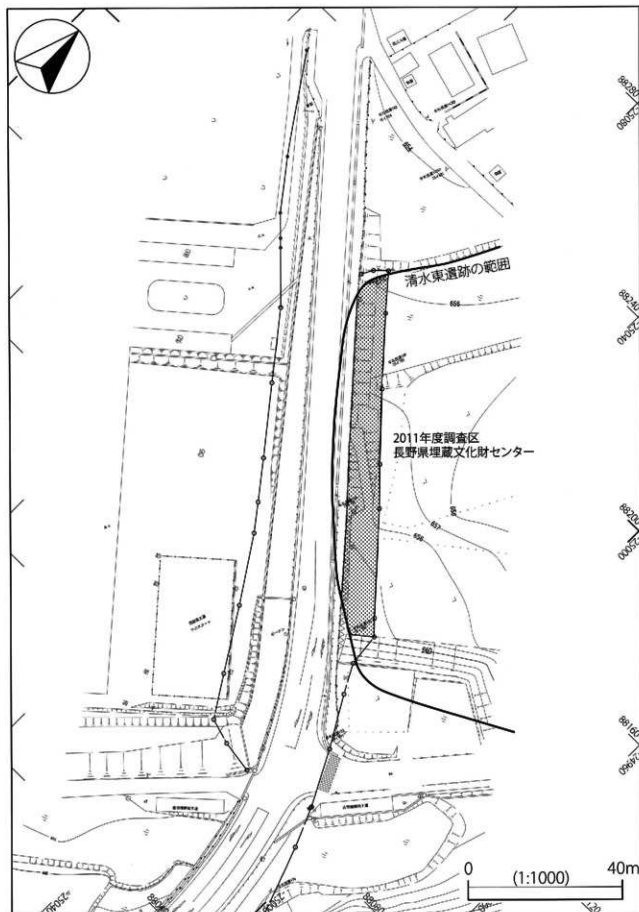
国道の北東側の約 95m の区間が清水東遺跡の調査区となる。この部分の国道は盛土造成されているため、調査区より数 m 高い位置にある。調査区のほぼ中央に耕作中の畑への進入路が存在していた。この進入路を避けて、北側に幅 1.2m、長さ 33m、南側に幅 1.2m、長さ 22m のトレンチを設定した（第 5 図、北トレンチと南トレンチ）。ローム層漸移層まで重機で掘削した後、人力精査により遺構検出をおこなったが、遺構・遺物は検出されなかった。その後、旧石器時代遺物の有無を探るため、トレンチ内におよそ 5m 間隔で、1.2m × 1m のテストピット 12 か所（TP1～12）を設定し、3 万年前以上前の層⁽⁹²⁾まで人力で掘削をおこなったが、遺構・遺物は検出されなかった。これらの結果より、周辺に遺構・遺物分布が広がる可能性がないと判断し、トレンチの拡幅及び、進入路部分の調査は不要と判断した。



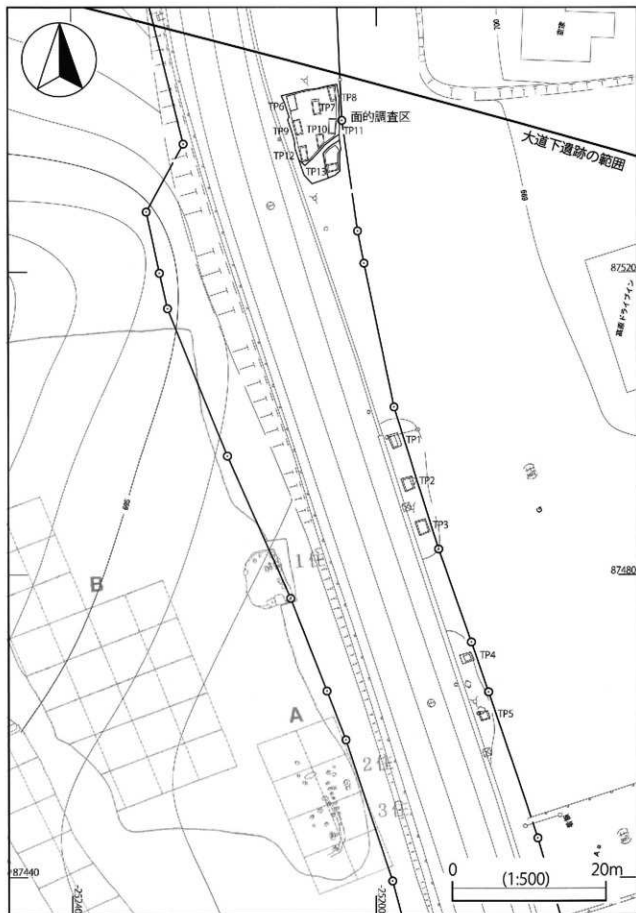
第1図 調査区と遺跡範囲



第2図 大道下遺跡の調査範囲



第3図 清水東遺跡の調査範囲



第4図 大道下遺跡のテストピット及び面的調査区配置状況

(2) 整理作業

平成24年2月から3月に、遺物の洗浄・注記、写真整理、図面整理、台帳登録等の基礎整理を実施した。並行して遺構図トレースや遺構図版作成、原稿執筆等の本格整理作業もおこなった。

平成25年1月に遺構図トレース、遺構図版作成、写真撮影、原稿執筆、発掘調査報告書の印刷をおこなった。

3 調査体制

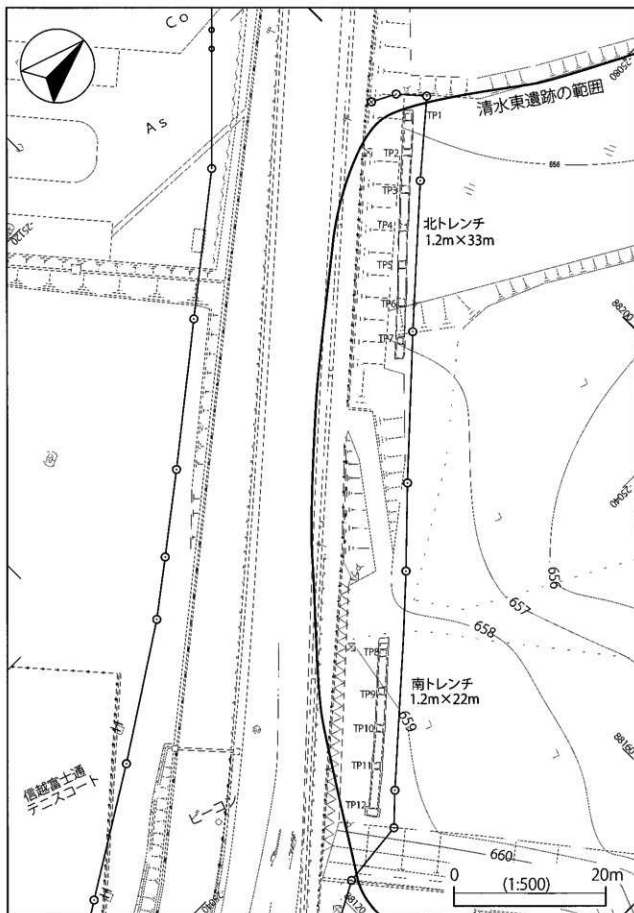
発掘作業、整理作業の体制は以下のとおりである。

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の調査研究員
平成23年	窪田久雄	大竹憲昭	岡村秀雄	谷 和隆 市川桂子
平成24年	窪田久雄	大竹憲昭	岡村秀雄	谷 和隆
平成23年度 発掘作業員	萩原千代子 川口二郎 佐藤仙治 長谷川 勉 長谷川美子 藤田桂子			
平成23年度 整理作業員	赤尾香苗 上原美千代 川上淳子 熊谷大輔 緑川うめ子			
平成24年度 整理作業員	赤尾香苗 西村はるみ 山下千幸			

第1表 調査体制

4 調査日誌抄

8月1日	発掘機材搬入開始(～12日)	前	
8月4日	地権者へ発掘調査開始の挨拶	8月24日	大道下遺跡：TP1～TP3の掘り下げ開始
8月8日	安全対策工事打ち合わせ及びユニットハウス設置場所の整備		清水東遺跡：北トレンチ内TP1～TP7、南トレンチ内TP8～TP12の駆定
8月9日	長野県教育委員会、信濃町教育委員会との現地協議 地権者、学校、病院等への挨拶回り、電気工事打ち合わせ	8月25日	清水東遺跡：TP1～7掘り下げ開始
8月10日	ユニットハウス設置、水道工事打ち合わせ、自治会関係への挨拶回り	8月29日	清水東遺跡：TP8～12掘り下げ開始
8月12日	遺跡周辺現地踏査	8月30日	清水東遺跡：南・北トレンチ清掃・写真撮影、TP断面写真撮影及び断面測量開始
8月17日	遺跡周辺地質状況確認、発掘機材整理	8月31日	清水東遺跡：TP上層観察 大道下遺跡：TP1～3清掃、断面写真撮影、TP4・5掘り下げ開始
8月18日	電気配線工事立会、清水東遺跡歩道沿い除草	9月1日	清水東遺跡：TP上層観察
8月19日	発掘機材整理、遺跡周辺地質状況確認		大道下遺跡：測量基準点確認及び標高測量
8月22日	発掘作業員作業開始、仮設水道工事立会 大道下遺跡：面的調査区重機による表土剥ぎ、人力による精査開始	9月2日	大道下遺跡：面的調査区TP掘り下げ開始、SK1検出、完削 清水東遺跡：測量基準点確認及び標高測量
8月23日	大道下遺跡：TP1～5重機による表土剥ぎ 清水東遺跡：南・北トレンチの重機による掘	9月5日	大道下遺跡：SK2検出、完掘、TP4断面写真撮影及び断面測量



第5図 清水東遺跡のトレンチ及びテストピット配置状況

9月6日	清水東遺跡：南・北トレンチ及びTP1～12平面測量 大道下遺跡：TP1・2・4平面測量、TP13断面写真撮影	測量 9月12日 大道下遺跡：TP7・9平面測量
9月7日	大道下遺跡：TP3・5～13、面的調査区、SK1・2平面測量、TP8～12断面写真、撮影、TP1～5埋め戻し	9月15日 大道下遺跡・清水東遺跡：埋め戻し開始 機材搬出開始
9月8日	大道下遺跡：TP7・9断面写真撮影	9月16日 発掘作業員作業終了
9月9日	大道下遺跡：TP6・8・11・12・13断面	9月27日 ユニットハウス撤去 9月29日 埋め戻し終了 9月30日 国土交通省確認 引き渡し

第2節 発掘調査の方法

1 発掘作業の方法

(1) 遺跡記号と遺構記号

遺跡記号

「大道下遺跡」の遺跡記号は「MOC」、清水東遺跡は「MSH」とした。長野県埋蔵文化財センターでは記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で示す遺跡記号を用いている。1文字目は長野県を9分割した長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡内の遺跡記号を示す「M」となっている。本来は「B」を用いる地域だが、調査遺跡が多く重複が生じるため、長野市内の新幹線建設に伴う調査遺跡及び上水内郡内の新規調査遺跡について予備とされて「M」を使用している。2文字目及び3文字目は遺跡のローマ字表記「OMICHI SHITA」、「SHIMIZU HIGASHI」から既設遺跡と重複しないように2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いた。

遺構記号

発掘調査では長野県埋蔵文化財センターが定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。

S B：2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。【竪穴住居跡・竪穴状遺構】

S K：単独、もしくは他の掘り込みとの関係が認められないS Bより小さな掘り込み。【土坑他】

なお、他にも多数の設定があるが、本書で用いる遺構記号は「S K」のみとなる。

(2) 調査グリッドの設定

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（X=0.0000 [北緯 36° 0′ 0″]、Y=0.0000 [東経 138° 0′ 0″]）を基点とする世界測地系の座標を用いて測量をおこなっている。従来の長野県埋蔵文化財センターではこの座標の200の倍数値を選んで、基準線を設定しグリッドを設けているが、今回は調査規模が小さいためグリッドを設けずに座標値のみで調査に対応することとした。

(3) 調査区の設定と遺構の発掘

大道下遺跡の調査区は同一地形面に収まっているので一つの調査区として調査をおこなった。そのため、調査区名は特に定めなかった。清水東遺跡も同様である。大道下遺跡と清水東遺跡の調査区は直線で約600m離れている。

I層（現地表土）及びその下部のII層（柏原黒色火山灰層）はいわゆる黒ボクといわれる土壌で黒色を呈している¹¹⁾。古代及び縄文時代の遺構面はII層中にあるが、遺構埋土も黒色のため色調のみでII層中

の遺構検出は難しい。これまでの調査経験から縄文時代以降の遺構が存在する場合、周辺から多数の土器片等が検出されることがわかっている。そのため、面的調査、トレンチ、テストピットの掘削は、色調で遺構検出が可能なⅢ層（ローム層漸移層）までは重機により慎重に掘り下げをおこなった後に人力精査により遺構検出をおこなうこととした。重機掘り下げ中に遺物が検出された場合は人力による掘り下げに切り替える予定だったが、検出された事例は生じなかった。

Ⅲ層以下が旧石器時代の遺物包含層となる。旧石器時代の遺物は縄文時代以降と比較して遺物密度が低く、重機による検出が難しいことから、Ⅲ層以下の掘り下げは人力でおこなうこととした。旧石器時代の遺物包含の下限はVc層で、VI層までV層中の遺物が沈み込むこともある。しかし、VII層の赤褐色スコリア層以下からの検出事例はないことから、VII層上面を掘削の下限の目途とした。

(4) 写真撮影

写真撮影は6×7一眼レフカメラを用い、白黒フィルム、リバーサルフィルムを用いて撮影した。また、デジタル一眼レフカメラでも同一カットの撮影を実施している。また、35mm一眼レフカメラで補助的な撮影もおこなっている。空中写真撮影は実施しなかった。

(5) 測量

国土交通省関東地方整備局が設置した3級測量基準点R18-150K52（大道下遺跡に隣接、X=88,583.963、Y=-25,228.587、H=698.575）とR18-151K15（清水東遺跡に隣接、X=88,125.513、Y=-25,053.368、H=662.380）を基準とし、光波トランシットと電子平板（遺構測量支援システム）を用いて測量した。

2 整理作業の方法

(1) 遺物の注記について

すべての遺物に注記をおこなった。遺跡記号のMOCを頭にし、遺物台帳に登録した袋番号1～11を記した。

なお、清水東遺跡から検出された遺物はなかった。

(2) 土器片の整理について

縄文土器、土師器、須恵器の分類をした。すべての遺物が小さな土器片で器形の復元ができるものはなかった。文様もないことから写真により資料提示をおこなった。

(3) 遺構図の整理について

全体図、遺構図、断面図等はIllustrator10・CS3・CS5を用いてトレースをおこなった。

3 遺物と記録の収納

遺物・尖測図面・写真は、報告書刊行後、信濃町教育委員会へ譲与の上保管される予定である。

註

註1) 大道下遺跡の層序については、第3章第2節（P21～23）を参照。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡が位置する上水内郡信濃町は長野県北端にあり、新潟県妙高市に接する。町域は東西に3つの地形に分かれている。東部は第三紀鮮新世から第四紀前期更新世の堆積岩を主体とする基盤山地が占め、それらの上を斑尾山起源の安山岩溶岩が覆っている。野尻湖はこの基盤山地の中に位置している。西部は第四紀火山である飯縄山、黒姫山、妙高山が南から北へ一列に並び、溶岩や泥流堆積物からできている。西側の火山と東側の山地にはさまれて第四紀中・後期更新世から完新世の湖沼・河川堆積物と泥流堆積物からなる丘陵、段丘および低湿地などが分布する。

黒姫山東麓を源とする信濃町北部の赤洗川と野尻湖を源とする池尻川は関川水系に属し、北方に流下して黒姫山と妙高山の間を流れる関川に合流してさらに北へ流れ日本海へそそぐ。一方戸隠山を源とし、黒姫山と飯縄山の間から東へ流れる鳥居川は千曲川（信濃川）水系に属し、信濃町古間から南東に向きを変え流下し千曲川に合流する。これらの両水系の分水嶺は信濃町柏原地区にある。

信濃町南部の平岡、穂波、大井地区には上水内郡北山部ではめずらしくやや広い平坦地があり、水田地帯となっている。この平坦地の西部は鳥居川による扇状地に覆われており、東部、南部の端の基盤山地と接する部分には半島状の小丘陵が点在している。これらは主に中期更新世の飯縄山起源の火山流下物（火砕流など）から構成されている。後期更新世から完新世にかけてはこの平坦地が湖沼あるいは低湿地となっていたため、島状に点在する小丘陵に遺跡が多く分布している。また古代以降はこの低湿地が次第に水田に開拓されてきたため、集落は一段高い丘陵上に発達した。

大道下遺跡はこのような丘陵の中央の一角に位置し、すぐ北側は深い断崖があり湧水と小川が流れる。一部畑地を含むが大部分は山林となっていた。

清水東遺跡は東流する鳥居川の形成した段丘上（信濃町内で最も新しい面である）に位置する。北西の信濃小中学校が立地する一段高い面は広域火山灰である始良丹沢火山灰（以下A Tと記す）が水成で堆積している。清水東遺跡の同道をはさんだ西側ではA Tの堆積以降も水成層の堆積が確認されている¹⁴⁾。

信濃町では西側と東側の火山の影響によりローム層が堆積している。主な火山灰の給源とそれぞれの火山の活動期は次のとおりである（赤羽1996）。斑尾火山は約70万年前と55万年前頃に活動をしていたが、約30万年前には活動を休止していたと考えられる。飯縄火山の活動開始期は約34万年前と約20万～15万年前の2回の活動期があり、約12～13万年前には活動を終了している。黒姫火山の活動開始年代は約25万年前で、その後2回の活動期が認められている。古期の活動は約16～11万年前、新期の活動は6万年前頃から活発となり、最新のマグマ噴火は約4.3万年前であり（主に中部野尻ローム層の時期）、3万年前頃には活動が衰えている。妙高山の活動開始年代は約30万年前で、約10万年前に再び活動を開始している。約2万年前にはカルデラを形成する大爆発を起こし、約6,000年前には中央火口丘を形成し現在に至っている。推定される最新のマグマ噴火は約4,200年前の大田切川火砕流を噴出させたもので、確認できる最後の活動は約2,600～3,000年前に起きた水蒸気爆発で、このときピダンゴと称される黄褐色の火山灰を降下させた。焼山火山の活動開始年代は約3,000年前で、歴史時代に入ってからマグマ噴火や水蒸気爆発を繰り返している活火山である。昭和期にも3回の水蒸気爆発を起こしており、



第6図 遺跡の位置（国土地理院数値地図25000を基に作成）

現在も活動中である。旧石器時代には斑尾、飯縄、黒姫火山がすでに休止しており、妙高火山が活動していた。縄文時代以降火山が活動を開始し、降灰を繰り返していたものと思われる。

野尻湖は日本海に面する高田平野と内陸の長野盆地との間にあり、面積3.96km²、水面標高654mで、その形が芙蓉の葉に似ることから「芙蓉湖」と呼ばれることもある。野尻湖は約7～6万年前に起こったと思われる黒姫火山の崩壊に伴って生じた池尻川泥流が、斑尾山西麓からの川を塞ぎ止めたことによって誕生したといわれている。旧石器時代以前には仲町丘陵の西側に広がる池尻川低地にまで湖が広がっていたが、その後、湖の西側の仲町丘陵の隆起と湖東側の沈降により、形を変化させながら現在の野尻湖へと変化していく。

この地は古くから日本海と長野県北信地方を結ぶ交通の要所となっていた。近世には北国街道が野尻湖の西側を通っており仲町遺跡内には野尻宿がある。また北国街道から分かれて飯縄山へ抜ける飯山道や戸隠に続く戸隠山道などの分岐点も仲町遺跡内にある。また延喜式に見られる巨理駅—多古駅—沼辺駅と連なる東山道支道のルートは北国街道に似た道筋と推定されており、沼辺駅は仲町遺跡周辺にあったとされている(黒坂1992)。

第2節 歴史的環境

信濃町内には173か所の遺跡が確認されており(信濃町教育委員会2003)(第7図、第2表)、その多くが旧石器時代から縄文時代前期と平安時代以降の遺跡である。特に野尻湖周辺に密集する旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡を野尻湖遺跡群と呼称している。弥生時代から古墳時代の遺跡は少ない。

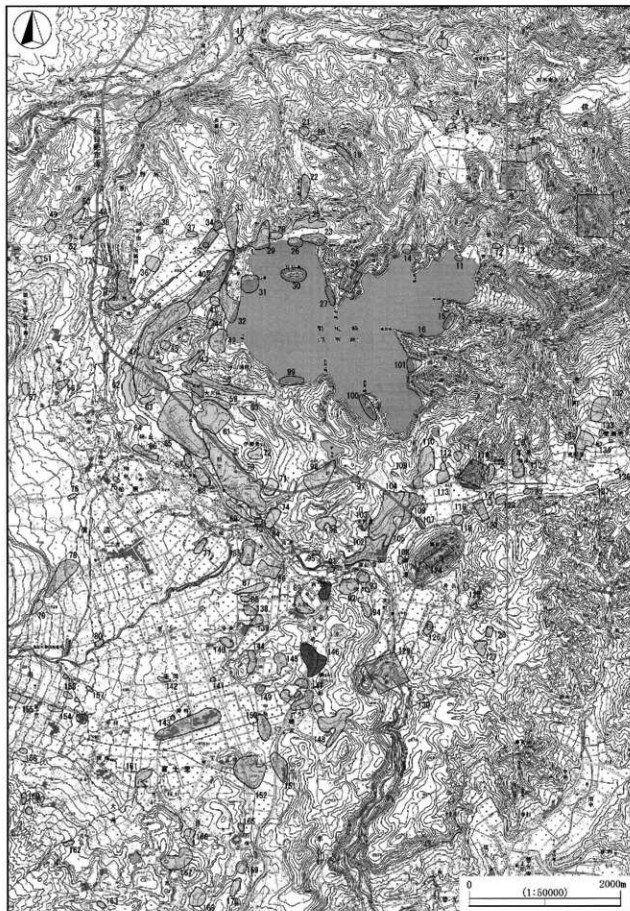
1948年に野尻湖岸でナウマンゾウの化石が発見されたことがきっかけとなり、1962年から野尻湖発掘調査団による19回の湖底発掘(立が鼻遺跡)がおこなわれている。立が鼻遺跡(31)の調査ではナウマンゾウやオオツノジカの化石が出土している(野尻湖発掘調査団1975ほか)。

1953年には芹沢長介、麻生優により杉久保遺跡(29)採集の石器が旧石器時代の遺物であることが確認され、杉久保型ナイフ形石器の標識遺跡として知られることになる(芹沢・麻生1953)。杉久保遺跡は1966年に町営駐車場の建設に伴う発掘調査が実施されている(森嶋ほか1970)。1976年からは野尻湖発掘調査団による陸上発掘が始まり、仲町遺跡(40)、貫ノ木遺跡(47)、仲町向新田遺跡(36・37)、照月台遺跡(46)が調査され、ナイフ形石器文化期～細石刃文化期の遺跡が確認されている(野尻湖人類考古グループ1987,1990)。そのほか、伊勢見山遺跡(72)(樋口ほか1964)の調査などもあり、野尻湖周辺に多くのナイフ形石器文化期以降の旧石器時代遺跡が確認され、野尻湖遺跡群として評価されている(織笠ほか1986)。

1989年から大規模開発に伴う記録保存調査が始まる。それまでの調査がトレンチ中心であったのに対し、平面的に広い調査がおこなわれるようになり、野尻湖遺跡群の性格がより明らかになる。特に平成5年～7年におこなわれた上信越自動車道建設に伴う発掘調査面積は16万㎡を上回る規模となった。

旧石器時代

現在確認されている野尻湖遺跡群中の最古の遺跡は立が鼻遺跡とされている。立が鼻遺跡からはナウマンゾウなどの動物化石が多く発見されている。これらは全身骨格ではなく、ばらばらになった状態で多量に出土するために、人為的に破砕されたキルサイトに関するものと予想されている。これらは湖底に堆積した水成層から検出されるが、化石は二次的に動いているものと考えられている。また動物化石とともに石器や骨角器が出土しているが、これらは人工でないとする意見もある。山上層厚が約3.8万年～5万年前であり、湖底以外でのこの時期の遺跡がみつからないことも遺跡の評価を難しくしている(野尻



第7図 信濃町の遺跡分布図（信濃町教育委員会 2003『信濃町の遺跡分布図』を基に作成）

番号	選跡名	所在地	口 田 基	堀 土 基	古 堀	古 井 口	中 近 世	番号	選跡名	所在地	堀 土 基	古 堀	古 井 口	中 近 世
1	福前A	古瀬・福前						68	新橋B	古瀬・新橋				
2	福前B	古瀬・福前						69	小志	古瀬・小志				
3	福前C	古瀬・福前						90	津水	津水・津水				
4	福前D	古瀬・福前						91	津水A	津水・津水				
5	福前E	古瀬・福前						92	津水B	津水・津水				
6	福前F	古瀬・福前						93	津水C	津水・津水				
7	福前G	古瀬・福前						94	津水D	津水・津水				
8	福前H	古瀬・福前						95	津水E	津水・津水				
9	福前I	古瀬・福前						96	津水F	津水・津水				
10	福前J	古瀬・福前						97	津水G	津水・津水				
11	福前K	古瀬・福前						98	津水H	津水・津水				
12	福前L	古瀬・福前						99	津水I	津水・津水				
13	福前M	古瀬・福前						100	津水J	津水・津水				
14	福前N	古瀬・福前						101	津水K	津水・津水				
15	福前O	古瀬・福前						102	津水L	津水・津水				
16	福前P	古瀬・福前						103	津水M	津水・津水				
17	福前Q	古瀬・福前						104	津水N	津水・津水				
18	福前R	古瀬・福前						105	津水O	津水・津水				
19	福前S	古瀬・福前						106	津水P	津水・津水				
20	福前T	古瀬・福前						107	津水Q	津水・津水				
21	福前U	古瀬・福前						108	津水R	津水・津水				
22	福前V	古瀬・福前						109	津水S	津水・津水				
23	福前W	古瀬・福前						110	津水T	津水・津水				
24	福前X	古瀬・福前						111	津水U	津水・津水				
25	福前Y	古瀬・福前						112	津水V	津水・津水				
26	福前Z	古瀬・福前						113	津水W	津水・津水				
27	福前AA	古瀬・福前						114	津水X	津水・津水				
28	福前AB	古瀬・福前						115	津水Y	津水・津水				
29	福前AC	古瀬・福前						116	津水Z	津水・津水				
30	福前AD	古瀬・福前						117	津水AA	津水・津水				
31	福前AE	古瀬・福前						118	津水AB	津水・津水				
32	福前AF	古瀬・福前						119	津水AC	津水・津水				
33	福前AG	古瀬・福前						120	津水AD	津水・津水				
34	福前AH	古瀬・福前						121	津水AE	津水・津水				
35	福前AI	古瀬・福前						122	津水AF	津水・津水				
36	福前AJ	古瀬・福前						123	津水AG	津水・津水				
37	福前AK	古瀬・福前						124	津水AH	津水・津水				
38	福前AL	古瀬・福前						125	津水AI	津水・津水				
39	福前AM	古瀬・福前						126	津水AJ	津水・津水				
40	福前AN	古瀬・福前						127	津水AK	津水・津水				
41	福前AO	古瀬・福前						128	津水AL	津水・津水				
42	福前AP	古瀬・福前						129	津水AM	津水・津水				
43	福前AQ	古瀬・福前						130	津水AN	津水・津水				
44	福前AR	古瀬・福前						131	津水AO	津水・津水				
45	福前AS	古瀬・福前						132	津水AP	津水・津水				
46	福前AT	古瀬・福前						133	津水AQ	津水・津水				
47	福前AU	古瀬・福前						134	津水AR	津水・津水				
48	福前AV	古瀬・福前						135	津水AS	津水・津水				
49	福前AW	古瀬・福前						136	津水AT	津水・津水				
50	福前AX	古瀬・福前						137	津水AU	津水・津水				
51	福前AY	古瀬・福前						138	津水AV	津水・津水				
52	福前AZ	古瀬・福前						139	津水AW	津水・津水				
53	福前BA	古瀬・福前						140	津水AX	津水・津水				
54	福前BB	古瀬・福前						141	津水AY	津水・津水				
55	福前BC	古瀬・福前						142	津水AZ	津水・津水				
56	福前BD	古瀬・福前						143	津水BA	津水・津水				
57	福前BE	古瀬・福前						144	津水BB	津水・津水				
58	福前BF	古瀬・福前						145	津水BC	津水・津水				
59	福前BG	古瀬・福前						146	津水BD	津水・津水				
60	福前BH	古瀬・福前						147	津水BE	津水・津水				
61	福前BI	古瀬・福前						148	津水BF	津水・津水				
62	福前BJ	古瀬・福前						149	津水BG	津水・津水				
63	福前BK	古瀬・福前						150	津水BH	津水・津水				
64	福前BL	古瀬・福前						151	津水BI	津水・津水				
65	福前BM	古瀬・福前						152	津水BJ	津水・津水				
66	福前BN	古瀬・福前						153	津水BK	津水・津水				
67	福前BO	古瀬・福前						154	津水BL	津水・津水				
68	福前BP	古瀬・福前						155	津水BM	津水・津水				
69	福前BQ	古瀬・福前						156	津水BN	津水・津水				
70	福前BR	古瀬・福前						157	津水BO	津水・津水				
71	福前BS	古瀬・福前						158	津水BP	津水・津水				
72	福前BT	古瀬・福前						159	津水BQ	津水・津水				
73	福前BU	古瀬・福前						160	津水BR	津水・津水				
74	福前BV	古瀬・福前						161	津水BS	津水・津水				
75	福前BW	古瀬・福前						162	津水BT	津水・津水				
76	福前BX	古瀬・福前						163	津水BU	津水・津水				
77	福前BY	古瀬・福前						164	津水BV	津水・津水				
78	福前BZ	古瀬・福前						165	津水BW	津水・津水				
79	福前CA	古瀬・福前						166	津水BX	津水・津水				
80	福前CB	古瀬・福前						167	津水BY	津水・津水				
81	福前CC	古瀬・福前						168	津水BZ	津水・津水				
82	福前CD	古瀬・福前						169	津水CA	津水・津水				
83	福前CE	古瀬・福前						170	津水CB	津水・津水				
84	福前CF	古瀬・福前						171	津水CC	津水・津水				
85	福前CG	古瀬・福前						172	津水CD	津水・津水				
86	福前CH	古瀬・福前						173	津水CE	津水・津水				
87	福前CI	古瀬・福前						174	津水CF	津水・津水				

第2表 信濃町の選跡一覧（信濃町教育委員会2003『信濃町の選跡分布図』を基に作成）

湖人類考古グループ 1987)。

ナイフ形石器文化期に入ると遺跡が激増する。全国的にみても遺跡数、遺物密度が非常に高い遺跡群として評価されよう。ナイフ形石器文化期以降の旧石器時代については、当センターの発掘調査成果を基にした編年案が示されている(第8図、谷 2007)。

第1期の遺跡から多くの斧形石器が山上する。その数は野尻湖遺跡群だけで239点を数える(中村 2010)。日本国内で検出されている斧形石器はおおよそ1000点^(※2)であることから、全国の4分の1程度の数の斧形石器が野尻湖周辺の狭い地域に集中していることとなる。また、数量が多く、形態の斉一性が高い台形石器は他地域にない特徴である。貫ノ木遺跡や仲町遺跡など1万点をはるかに上回る遺物数を持つ遺跡があるなど、大規模遺跡が存在する。

第2期にはナイフ形石器が発達する。珪質頁岩を主要石材として、基部を中心に加工を施す杉久保系、黒曜石を主要石材として2割餘に加工が施される茂呂系、無斑晶質安山岩を主要石材として、翼状の横長剥片を素材とする国府系のナイフ形石器が登場し、それぞれが第4期まで継続する。第2期の後半にA Tの降灰があった。

第3期は最終氷期最寒冷期にあたる。前後と比較すると遺跡数が減り、規模も小さくなる。

第4期には第3期に登場した尖頭器石器群が盛期を迎える。また、杉久保系石器群でも杉久保型ナイフ形石器と神山型彫器が隆盛する。第3期に縮小した遺跡数、遺跡規模は増大、拡大する。

第5期には遺跡数が再び減少するが、他地域と比較するとまだまだ多く、縄文時代草創期に継続する。

縄文時代

縄文時代草創期の遺跡数は多い。星光山荘B遺跡(172)では隆起縄文土器片とそれに伴う石器類が多量に発見されており、仲町遺跡には爪形土器、円孔土器が多くみられる。特に草創期末から早期にかけての表裏縄文土器～押型土器の遺跡数は多く、貫ノ木・東裏(70)・日向林A(104)・七ツ栗(106)・大道下(146)・丸谷地(145)・市道(166)・塞ノ神(127)遺跡(信濃町)などに良好な資料がある。沈線文系土器は貫ノ木遺跡などでまとまった資料が出土しているが、早期末の資料は少ない。

縄文時代前期では、日向林A・日向林B(105)・七ツ栗・市道遺跡(信濃町)などで比較的まとまった資料が出土しているが、遺物のみで遺構は確認されていない。長野盆地部に近い丸山遺跡(飯綱町)で竪穴住居跡が、上浅野遺跡(長野市)で配石遺構が確認されている。


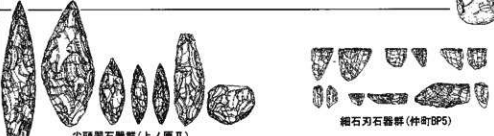
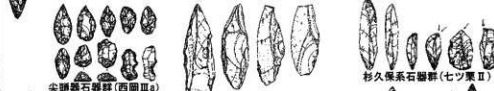





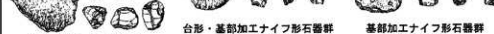
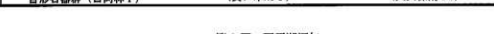
中期に入ると野尻湖周辺では遺跡数が減り、土器片が断片的に出土するのみである。野尻湖から南へ約11kmの上赤塩遺跡(飯綱町)で中期前半の集落が確認されており、千田・姥ヶ沢・風呂屋遺跡(中野市)、深沢遺跡(飯山市)などで多量の遺物が発見されている。

後期の集落は山間部では確認されていないが、仲町・川久保(33)・山手(17)・仁之倉A(78)遺跡(信濃町)、兼俣(妙高市)・松原B・南田・龍峯・小丸山遺跡(上越市)などで遺物が出土している。

晩期では、和泉A遺跡(上越市)で晩期～弥生前期の土器と掘立柱建物跡などが発見された。同時期の土器は仲町遺跡でも出土した。ほかに星光山荘B・川久保・仁之倉A遺跡などで遺物が出土している。

弥生時代

山間部の弥生時代の遺跡は少ない。中期では山根遺跡(94)(信濃町)で竪穴住居跡が発見されているほかは、仲町・川久保・七ツ栗遺跡(信濃町)などで土器が出土している。後期では川久保・仲町・大平B(97)遺跡(信濃町)で土器が採集されているものの、集落は確認されていない。千曲川流域では中期の栗林・柳沢遺跡(中野市)、照丘・上野・小泉遺跡(飯山市)などで集落と墓、後期では七瀬・がまん瀬・間山遺跡(中野市)、東長峰・田草川尻・小泉・上野遺跡(飯山市)などで集落跡が確認されている。

階序	時期	縄文草創期	 <p>縄文時代草創期(星光山荘B)</p>			野尻湖人跡考古G	諏訪間段階	武蔵野台地
			III	第V期	 <p>尖頭礫石器群(上ノ原II) 細石刃石器群(仲町BP5)</p>	モヤ	IX	III
IV上	IV期	第IV期	 <p>尖頭礫石器群(西岡IIIa) 尖頭礫石器群(貫ノ木H1IIIc)</p>	VIII	VII	IV上		
			 <p>園府系石器群(西岡IIIb) 園府系石器群(貫ノ木H2IIIb)</p>					
IV中・下	第III期	第III期	 <p>尖頭礫石器群(東原H2III) 園府系石器群(貫ノ木H2II)</p>	上計層上面	VI	IV下	V	
			 <p>頁岩製基部加工ナイフ形石器群(貫ノ木H2II)</p>					
V a	第II期	第II期	 <p>台形石器群(仲町BP) 茂呂系石器群(貫ノ山II) 園府系基部加工ナイフ形石器群(東原H2II)</p>	上計層下部	IV	VI	VII	
			 <p>基部加工ナイフ形石器群(仲町BP2)</p>					
V b	第I期	第I期	 <p>台形石器群(日向林I) 台形・基部加工ナイフ形石器群(貫ノ木H3I)</p>	黒色帯上部	IX	X	I	
V c		 <p>基部加工ナイフ形石器群(大久保南1b)</p>						

第8図 野尻湖層年

古墳時代

信濃町では野尻湖畔のみで古墳時代の遺跡が確認されている。仲町遺跡、川久保遺跡は数少ない調査例である。以前は、山間部の古墳時代の遺跡はほとんど明らかにされておらず、遺跡の空白地帯となっていた。近年の発掘調査により、遺跡の存在が次第に明らかになってきた。川久保遺跡（信濃町）、大洞原C・小野沢西遺跡（妙高市）からは多量の土器が出土しており、遺構は確認されていないが、集落跡の存在が想定されている。このほか仲町・東裏遺跡（信濃町）では少量であるが土器が出土している。また仲町遺跡では古墳時代～奈良時代の年代値が得られた木製品が出土した。野尻湖を臨む山麓に古墳の可能性がある塚が1基確認されている。古東山道支道が古墳時代にあった可能性をうかがわせる資料が蓄積されつつある。仲町遺跡もそのような遺跡の一つであると考えたい。また、盆地部の弥生時代末から古墳時代前期にかけて北陸系の土器を出土する集落跡があり、野尻湖付近を経由するルートが注目される。

奈良時代・平安時代

平安時代になると再び山間部に遺跡が多く見られるようになる。大規模な集落は発見されていないが、住居が数件程度の小規模な遺跡が点在するようになる。仲町・貫ノ木・東裏・針ノ木（98）・七ツ栗・丸谷地遺跡で発見された住居跡はほとんどが9世紀末以降のものである。仲町遺跡などでは9世紀前半と思われる住居跡が検出されており、山間部では古い集落といえる。野尻湖周辺は、東山道支道が通っていたとされ、仲町遺跡は沼辺駅の推定地の一つとされている。奈良時代の信濃国府から越後国府につながる東山道支道は、江戸時代の北国街道に沿った野尻湖を抜けていくルートが妥当であると考えられている（黒坂1992）。今池遺跡群（上越市）が越後国府と推定されており、8世紀末～9世紀初頭の集落が仲町遺跡に確認されたことにより、仲町遺跡周辺に沼辺駅が所在した印象がより強くなってきた。

中・近世

近世では北国街道が野尻湖畔を通過しており、仲町遺跡の南端には一里塚も残されている。信濃町内では古閑・柏原・野尻の各宿場があり、小林一茶の牛家などの発掘調査が実施されている。しかしながら、近世宿場は現在の集落と重なっており、宿場関連の発掘調査はあまり実施されていない。仲町遺跡（長野県埋蔵文化財センター2004）では野尻宿関連の遺構や、さらに中世までさかのぼる建物跡が確認された。中世では野尻城跡（23）などの城跡が知られている（各遺跡の位置、時期については第7図、第2表を参照。信濃町の遺跡調査の歴史については第3・4表に掲載した。）。

註

註1) 中村由克氏のご教示による。

註2) 2010年6月5日・6日に八ヶ岳田石器研究グループほかが開催した『日本列島における農薬同位体ステージ3の古墳と現代人的行動の起源』シンポジウム内の橋本勝雄氏のコメントによる。

年度	野尻湖の発見	信濃町内の発見	基礎文センターの発見	おもなできごと
1948 (昭23)	ナウマンゾウの化石発見			
1953 (昭28)		杉久保遺跡の仁衛、旧石倉と判明		
1958 (昭33)		仁之倉遺跡(簡墓)		
1962 (昭37)	六野尻湖発見始まる 第1次野尻湖発見	杉久保遺跡		ナウマンゾウ、オオツノジカ化石を発見
1963 (昭38)	第2次野尻湖発見	伊勢良山遺跡(岡学院大学) 杉久保遺跡		野尻湖発見、10年代測定と花粉分析による ウルム氷期の確認
1964 (昭39)	第3次野尻湖発見	杉久保遺跡		はじめて石器(刺刀)を確認
1965 (昭40)	第4次野尻湖発見	杉久保遺跡 琵琶島遺跡		ナウマンゾウの歯骨の一部を発見
1966 (昭41)		杉久保遺跡(駐屯場)		
1967 (昭42)		狐久保遺跡(町道)		
1973 (昭48)	第5次野尻湖発見			「月と星」の発見
1974 (昭49)	74年3月調査調査 74年10月仲町調査			
1975 (昭50)	第6次野尻湖発見			
1976 (昭51)	第1回陸上発見(仲町)			
1977 (昭52)		仲町(水溜り跡)		
1978 (昭53)	第7次野尻湖発見			
1979 (昭54)	第2回陸上発見(仲町)			黒砂岩でナウマンゾウの牙を発見 仲町遺跡で縄文時代草創期の土坑墓発見 台形状のナイフ形石器発見
1981 (昭56)	第8次野尻湖発見			「ヤリ根木跡」、骨製スレイバーの発見 2.4mのナウマンゾウの牙発見
1982 (昭57)	第3回陸上発見(仲町、向新田)			興隆又土器の発見
1984 (昭59)	第9次野尻湖発見			キルサイトの確認
1985 (昭60)	第4回陸上発見(仲町、向新田、 野月台、真ノ木)	大久保南遺跡(十取り)		
1987 (昭62)	第10次野尻湖発見			骨製クレーパー発見
1988 (昭63)	第5回陸上発見(真ノ木)			標群と配石を伴う牛歯山を確認
1989 (平1)		☆町教育委員会の調査始まる 丸谷地遺跡(町道) 大道下遺跡(町道)		丸谷地遺跡で平安時代の住居跡を発見 灰陶陶器、鏡などが出土
1990 (平2)	第11次野尻湖発見	大道下遺跡(会社事務所) 上ノ原遺跡(簡墓) 杉久保遺跡(町道) 一里塚遺跡(町道) 丸谷地遺跡(町道)		第11次発見でナウマンゾウの足跡化石を確認 上ノ原遺跡で5基が並んだ石円盤を発見
1991 (平3)	第6回陸上発見(仲町)	真ノ木遺跡 大道下遺跡 丸谷地遺跡(資材置場) 赤川遺跡(国道18号)		陸上発見でナウマンゾウの化石発見
1992 (平4)		真ノ木遺跡(簡墓) 東高遺跡(町道) 役屋敷遺跡(古蹟) 赤川遺跡(国道18号) 江原遺跡(古蹟)		真ノ木遺跡で骨部調整石斧4点や特殊な大須 磨を発見
1993 (平5)	第12次野尻湖発見	東高遺跡(特別音楽老人ホーム) 車庫遺跡(宅地造成) 上ノ原遺跡(町道) 毛無遺跡(町道) 内岡B遺跡(宅地造成) 七ツ米遺跡(泉道)	☆高道道路建設に伴う発見調査始まる 日向林B遺跡 七ツ米遺跡 車庫遺跡 口ノ木遺跡 普光川遺跡	日向林B遺跡で石斧41点出土 上ノ原遺跡で杉久保型ナイフ形石斧多数出土 車庫遺跡(町)で瀬戸内系の石磨群が出土 東高遺跡(町)で「刺刀痕跡」出土

第3表 信濃町の遺跡調査の歴史1(信濃町教育委員会作成)

第2章 遺跡の位置と環境

年度	野尻湖の発掘	信濃町市内の発掘	県史文センターの発掘	その他できごと
1994 (平6)	第7回陸上発掘(仲町)	東武遺跡(町道) 七ツ栗遺跡(県道) 日向林B遺跡(宅地) 真ノ木遺跡(宅地) 北ノ原B遺跡(町道) 山根遺跡(広域農道) 高山遺跡(ゴルフ場) 市道遺跡(ゴルフ場)	七ツ栗遺跡 日向林B遺跡 大平B遺跡 真ノ木遺跡 東武遺跡 トノ原遺跡 西岡A遺跡	真ノ木遺跡(県)で両石B点出土 山根遺跡で弥生土器が多数出土
1995 (平7)		大久保南遺跡(県道) トノ原遺跡(ガソリンスタンド) 上ノ原遺跡(消防署) 役所敷遺跡(急傾斜対策) 山根遺跡(広域農道) 市道遺跡(ゴルフ場) 清水久保遺跡(ゴルフ場) 上ノ原遺跡(県道) トノ原遺跡(宅地)	七ツ栗遺跡 日向林B遺跡 東武遺跡 大久保南遺跡 上ノ原遺跡 真ノ木遺跡 西岡A遺跡 星光山荘B遺跡	大久保南遺跡(県)で黒曜石がまとまって出土 市道遺跡で縄文土器など24,000点以上出土 星光山荘遺跡で埴手保型石斧など旧土 上ノ原遺跡(町)で瀬戸内系の石器群が多数出土
1996 (平8)	仲町遺跡、立が鼻遺跡で地質調査	上ノ原遺跡(県道) 吹野原A遺跡(広域農道) 山根遺跡(広域農道) 大久保南遺跡(県道) 七ツ栗遺跡(町道) 大道下遺跡(埋立て) 東武遺跡	真ノ木遺跡	上ノ原遺跡で瀬戸内系石器群が2つの地層から出土 吹野原A遺跡で鼓き石群が出土 山根遺跡で弥生時代中期の住居跡が出土 大道下遺跡で縄文時代早期の土器群が多数出土
1997 (平9)	第13次野尻湖発掘 仲町遺跡、立が鼻遺跡で地質調査	吹野原A遺跡(山域農道) トノ原遺跡(県道) 真ノ木遺跡(ガスパイプ) 東武遺跡(町道) 上ノ原遺跡(町道) 照月台遺跡(店舗) 役所敷遺跡(駐屯場)		トノ原遺跡で硝石と石神奈材が認められた状態で出土 東武遺跡で瀬戸内系の石器群が出土 照月台遺跡で古手の杉久保型ナイフと小形の石器群が出土 吹野原A遺跡で大形の石杵が出土
1998 (平10)	第8回陸上発掘(仲町)	大久保南遺跡(個人住宅) 山根A遺跡(町道) 針ノ木遺跡(町道) 丸谷地遺跡(工場)		大久保南遺跡で基部加工のナイフ形石器が出土 丸谷地遺跡で平安時代の集積を確認、縄文時代早期の上層が多数出土
1999 (平11)		仲町遺跡(個人住宅) 吹野原A遺跡(山域農道) 仲町遺跡(国道18号) 東武遺跡(町道)	☆国道18号バイパスに伴う発掘調査が始まる 真ノ木遺跡 照月台遺跡 川久保遺跡	照月台遺跡で旧石器時代の土壌を確認 吹野原A遺跡と仲町遺跡で石臼形群が出土 川久保遺跡で弥生土器が多数出土
2000 (平12)	第14次野尻湖発掘	吹野原A遺跡(広域農道) 仲町遺跡(国道18号) 仲町遺跡(店舗)	仲町遺跡	仲町遺跡で縄石刃文の生活用、オオツノジカ の足跡化石を確認、縄文早期の土器が多数出土
2001 (平13)		仲町遺跡(国道18号) 役所敷(史跡整備)	仲町遺跡 吹野原A遺跡(県道)	仲町遺跡でナクマンゾウの足跡を多数確認、 石器出土 オオツノジカの白歯化石とナイフ形石器が出土
2002 (平14)		東武遺跡(個人住宅) 役所敷遺跡(史跡整備)	仲町遺跡(除雪ステーション)	仲町遺跡で台形石器と石斧の石器群が出土 東武遺跡で石臼形群が出土
2003 (平15)	第15次野尻湖発掘	真宿寺遺跡(ため池)		ナクマンゾウ化石の詳細な調査を調査 遺物等から縄文早期の土層が出土
2004 (平16)		杉久保遺跡(個人住宅)		杉久保遺跡で縄文早期、中期、弥生後期、古 墳前期の土層が出土
2005 (平17)		狐久保遺跡(個人住宅)		狐久保遺跡で縄文晩期の土層が出土
2006 (平18)	第16次野尻湖発掘	清明台遺跡(個人住宅)		第16次発掘でニホンジカの足跡化石を発見 照月台遺跡で後期旧石器時代の石器群が出土 大久保南遺跡、大道下遺跡で後期旧石器時代の 石器群が出土
2007 (平19)		大久保南遺跡(県道) 東武遺跡(個人住宅) 大道下遺跡(T地・店舗)		東武遺跡で縄文早期の土層が出土
2008 (平20)	第17次野尻湖発掘	神山B遺跡(個人住宅)		第17次発掘でヘラジカの化石が出土 神山B遺跡で縄文前期の上層が出土
2009 (平21)		仁之倉A遺跡(個人住宅)		
2010 (平22)	第18次野尻湖発掘	宮ノ原遺跡(個人住宅)		第18次発掘で化石を含む地層の環境環境を 詳細に調査 宮ノ原遺跡で縄文早期の上層が出土
2011 (平23)		吹野原A遺跡(個人住宅) 辻屋遺跡(宅跡老所)	大道下遺跡 清水東遺跡	辻屋遺跡で平安時代の発見遺物の一部を検出 国道18号野尻バイパス道路収束予定地で試 掘調査を実施したが、新たな遺跡の発見には 至らなかった
2012 (平24)	第19次野尻湖発掘			

第4表 信濃町の遺跡調査の歴史2(信濃町教育委員会作成)

第3章 大道下遺跡

第1節 調査の方法

調査対象地は国道18号の東側で幅1.4mから4.5mの拡幅部にあたる。店舗の駐車場として使用されており、表土は整地のためのアスファルト舗装や碎石が敷いてある状況であった。既存の電柱、消火栓の保護と、国道と駐車場への出入り口の確保をおこなったため、拡幅部が狭い調査区南半分の長さ58mほどの範囲は、約1m×2mのテストピットを5か所（TP1～5）設定し、拡幅部が広い調査区北部の長さ20mほどの範囲は面的調査をおこなうことにした（第4図）。

テストピットの調査ではバックホーを使用して表土を除去した後、人力で両刃鎌や移植ごてを使用して遺構、遺物の検出をおこないながら掘り下げた。面的調査区の調査でも同様にバックホーを使用して表土を除去した後、さらに黄褐色のローム層上面まで遺構、遺物の確認をしながらバックホーを使用して除去した。その後人力で両刃鎌や移植ごてを使用して遺構、遺物の検出をおこないながら掘り下げた。さらに下位の確認のため1m×2mのテストピットを8か所（TP6～13）設定し掘り下げた。

第2節 層序

信濃町は黒姫山や妙高山といった火山灰の給源となる火山が西方に所在するため、広い範囲で共通した堆積がみられる。上信越自動車道及び国道18号野尻バイパスの建設に伴う発掘調査では信濃町内共通の層序として、ローマ数字を用いた基本層序を設定した（長野県埋蔵文化財センター2000aほか）。

大道下遺跡の調査区の層序は以下のとおりであり、Ⅰ～Ⅶ層はこれまでの基本層序に対応する。

Ⅰ層：表土

1：アスファルト、2：碎石、3：客土、かく乱、4：Ⅱ層起源、5：Ⅲ層起源。

Ⅱ層：Hue10YR3/1、黒褐色シルト、粘性普通、締り普通。やわらかい。

Ⅲ層：Hue10YR4/2～5/6、灰黄褐～黄褐色シルト、粘性普通、締り普通。Ⅱ層とⅣ層の漸移層。

Ⅳ層：Hue10YR6/8、黄褐色シルト、粘性普通、締り普通。風化火山灰層。

V層：a、b、cの境は不明瞭、色調のわずかな差で分層した。赤褐色スコリア、青灰～灰色岩辺が全体にちる。

V a層：Hue10YR6/6～5/6、明黄褐～黄褐色シルト、粘性ややあり、締りややあり。V b層のブロックを含む。

V b層：Hue10YR5/4、にぶい黄褐色シルト、粘性ややあり、締りややあり。従来のV b層より色調が薄い。

V c層：Hue10YR6/6～5/6、明黄褐～黄褐色シルト、粘性ややあり、締りややあり。

Ⅵ層：Hue10YR5/6、黄褐色シルト、粘性ややあり、締りあり。赤褐色スコリア（Ⅶ層起源）、青灰～灰色岩片（Ⅶ層起源）を全体に含む。

Ⅶ層～Ⅵ層：Hue10YR6/8、明黄褐色シルト、色調はⅣ層に類似するが、締りややよい。Hue10YR4/4褐色ローム（V層起源か）のブロック径1～3cmを全体にまばらに含む。Hue5YR4/8赤褐色スコリア（径5mm以下）、灰色岩片（径5mm以下）をわずかに含む。

Ⅷ層：Hue5YR4/8、赤褐色スコリア層、径2mm～1cm、最大1.5cmのスコリア密集。粘性なし（基質

の黄褐色シルトの部分は粘性ややあり）、締り非常によい（固結よい）。

Ⅷ層：Hue10BG6/1～N6/0、青灰～灰色岩片、明褐～黄褐色スコリア密集層、径2～5mmの岩片、スコリア密集。粘性なし、締り非常によい。

各テストピットでの観察を記載する。

TP1

地表より0.7m掘り下げた。表土は碎石とかく乱からなる。Ⅳ層～Ⅶ層を確認した。テストピット底部でⅦ層の赤褐色スコリアを確認したが、Ⅴ層とⅥ層の明確な分層はできなかった。Ⅶ層上部には基質の黄褐色シルトの粘質土を認めた。

TP2

地表より0.6m掘り下げた。表土は碎石とかく乱からなる。Ⅳ層～Ⅶ層を確認した。TP1同様にⅤ層とⅥ層の明確な分層はできなかった。

TP3

地表より0.6m掘り下げた。表土は碎石と盛土、かく乱からなる。Ⅳ層～Ⅶ層を確認した。TP1同様にⅤ層とⅥ層の明確な分層はできなかった。

TP1～TP3は同様の堆積状況である。

TP4

地表より0.8m掘り下げた。表土は碎石と盛土、かく乱からなる。Ⅲ層の下部、Ⅳ層、Ⅴ層～Ⅵ層が確認された。Ⅲ層の上位に一部4層（Ⅱ層に類似するがⅣ層の黄褐色ロームの細かい粒子を含む。Ⅱ層と比べて締りがよい。）や5層（Ⅲ層に類似するが締りがよい。）を観察した。遺構の埋土であるかどうかは不明である。Ⅲ層から土師器片、縄文土器片が出上している。

TP5

地表より0.8m掘り下げた。表土は碎石と整地のためのかく乱からなる。下位は4層：Hue10YR2/3黒褐色砂質シルト。黄褐色ロームの細かい粒子を上部は日立って含む。下部になるほど少なくなるが、締りがよくなる。固結よい部分があり竅穴住居跡の床面の可能性を検討した。竅穴住居跡内としては遺物密度が低く、固結面も認められないため、竅穴住居跡ではないと判断した。土師器8片、須恵器2片が出上している。

TP6

地表より1.42m掘り下げた。表土はアスファルトや碎石、かく乱からなる。明確なⅡ層はない。Ⅱ層に類似する4層、Ⅲ層に類似する5層を確認した。その下位にⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層を確認した。Ⅴ層のa、b、cの境は不明瞭でわずかな色調の差で分層している。トレンチ底はⅦ層まで達していないが、Ⅵ層中にⅦ層のブロックが含まれていた。

TP8

地表より1.3mまで掘り下げた。表土はアスファルトや碎石、かく乱からなる。明確なⅡ層はない。Ⅱ層に類似する4層、Ⅲ層に類似する5層を確認した。その下位にⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層を確認した。Ⅴ層のa、b、cの境は不明瞭。Ⅴ層は色調が薄い。Ⅶ層はⅥ層中にブロックで含まれていた。テストピット底はⅦ層に相当するか。

TP11

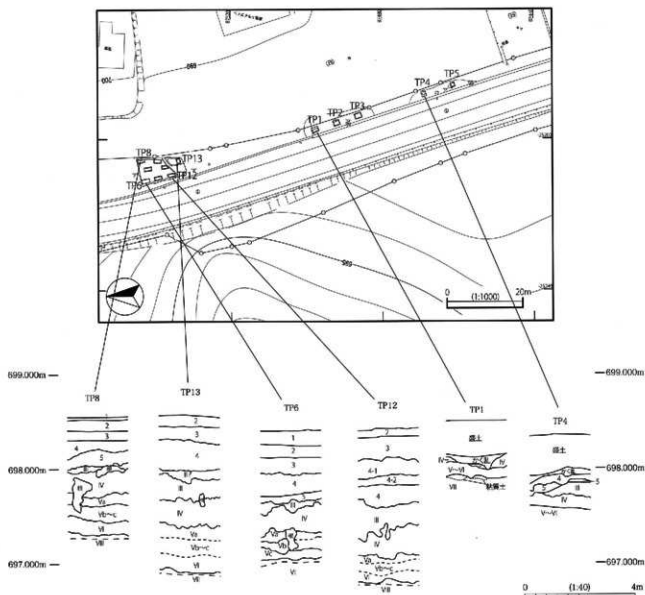
地表より1.5mまで掘り下げた。表土は碎石とかく乱からなる。明確なⅡ層はない。Ⅱ層に類似する4層を確認した。その下位にⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅶ層を確認した。Ⅴ層の分層は不明瞭である。トレンチ底部は大きめのブロックからなるⅦ層である。

TP12

地表より1.7mまで掘り下げた。表土は碎石とかく乱からなる。明確なⅡ層はない。Ⅱ層に類似する4層を確認した。4-1層は黄褐色シルトの細かいブロックを含む。4-2層は最もⅡ層に類似する。しまり普通でやわらかく、4-1層・4層との境は明瞭である。その下位にⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅶ層を確認した。Ⅴ層の分層は不明瞭であり、Ⅴ層とⅥ層の境も不明瞭である。

TP13

地表より1.72mまで掘り下げた。表土は碎石とかく乱からなる。Ⅱ層に類似する4層を確認し、その下位にⅡ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅶ層を確認した。Ⅴ層の分層は不明瞭である。



第9図 大道下遺跡の層序

第3節 遺構

1 概要

5か所のテストピットと面的調査区で遺構検出を試みた結果、面的調査区より2基の土坑が検出された。

テストピットではいずれも遺構検出面となるⅢ層まで、表土とした造成土が及んでおり、Ⅳ層中で遺構検出をおこなっている。信濃町内には、ローム層を大きく掘り込まない竪穴住居跡が多くみられる。そのため、竪穴住居跡については造成により破壊されている可能性がある。

面的調査区の造成はⅡ層までと考えられる。ただし、Ⅱ層主体で構成される造成土と自然堆積のⅡ層の区別が非常に難しく、明らかに自然堆積と判断できるⅡ層は確認できなかった。Ⅲ層は残されていたため、本来の検出面で遺構検出をおこなうことができた。しかし、地表からのかく乱が多くみられた。

2 土坑

(1) SK1 (第10・11図)

Ⅳ層上面付近で検出をおこなった。他の遺構との切り合いはない。平面形は長径50cm、短径40cmの隅丸方形に近い円形を呈する。深さは検出面より70cmで、最深部は検出面掘り込み部中心付近と、検出面掘り込み部中心から約60cm北の2か所にある。規模から柱のようなものを立てるための掘り方と考えられるが、一度垂直に立てた後に斜めに差し込んだ結果2か所の最深部を有する形状になったものと推測される。単層で、短時間の間に意図的に埋められたと考えられる。埋土の状況からⅡ層堆積後に掘られた穴と思われる。遺物が検出されなかったため、時期を特定することができないが、締りの悪い黒褐色土の状況から古代以降に掘られたもので、最新で現代まで下ると考えられる。

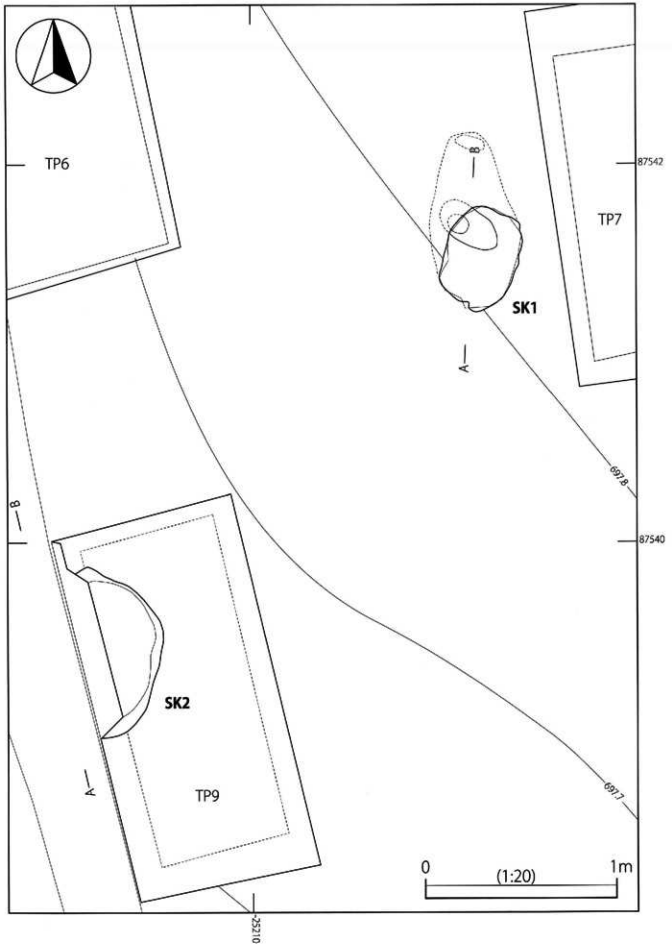
(2) SK2 (第10・11図)

重機によりⅣ層上面付近まで掘り下げた後、テストピット9を設定した。この時点で黒色土の乱れがあったが、かく乱の可能性が高いと判断をして、Ⅳ層面の掘り下げを始めた。Ⅳ層を約10cm掘り下げたところで、遺構の存在を確認した。その後、テストピットの掘り下げを中断して、遺構調査を実施した。調査区の西端に位置しており、西半分は現国道18号の下に入り込んでおり、調査をおこなえなかった。単独で切り合いはない。

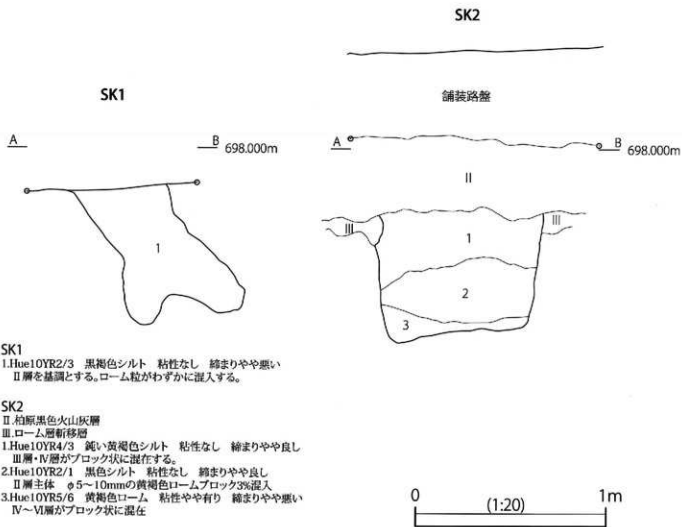
平面形は長径約80cm、短径約60cm程度と予測される。検出面と底面の平面形状は相似形となる。深さは70cm程度。

1～3層が埋土となる。それぞれ明確に分層できるが、ブロック状に異なる層が混じり合っている状況から人為的に埋め戻されたと考えられる。Ⅲ層を切って掘り込み、Ⅱ層にバックされていることから、縄文時代～平安時代に属すると考えられる。遺物は検出されなかった。

形状的には陥し穴の可能性が考えられるが逆茂木等の施設はなく断定は難しい。



第10圖 SK1・SK2平面圖



第11図 SK1・SK2断面図



SK2断面写真

第4節 遺物

1 概要

TP4 から9片、TP5 から10片、面的調査区から2片の土器片が検出されている。いずれも、表土（造成土）から検出され、遺構に伴わない。

2 縄文時代の遺物

(1) 縄文土器 (PL4: 1~3)

TP4 から3片の縄文土器片が検出されている。いずれも無文の胴部で厚さが7.5mm前後となっている。胎土が似ており同一個体の可能性がある。外面は明黄褐色 (Hue10YR6/6)、内面は灰黄褐色 (Hue10YR5/2) を呈する。細かい繊維を含む。小片であるため時期の特定が難しい。早期あるいは草創期の無文土器であろうか。

3 古代の遺物

(1) 須恵器 (PL4: 4、PL5: 9・10)

4はTP4から検出されている。壺の頸部である。内外面とも褐灰色 (Hue10YR6/1) を呈する。厚さ6.4mm
9はTP5から検出された。壺の胴部であろうか。外面は黒色 (Hue10YR1.7/1)、内面は褐灰色を呈する。内外面共に自然釉がみられる。厚さ5.2mm。

10はTP5から検出された。壺の胴部で外面に叩目がみられる。外面は褐灰色 (Hue10YR5/1)、内面は酸化還元が不十分で明黄褐色 (Hue10YR6/6) を呈する。厚さ8.0mm。

(2) 土師器 (PL4: 5~8、PL5: 11~20)

TP4 から5~8、TP5 から10~18、面的調査区から19・20が検出された。

5は壺の胴部であろうか、外面に稜がみられる。内外面はにぶい黄褐色 (Hue10YR7/4) を呈する。厚さ6.8mm。

7は内面黒色の杯の口縁部片である。外面は橙色 (Hue7.5YR6/6) を呈する。厚さ3.9mm。

6・8は破片が小さく詳細は不明。

11は壺の胴部内外面はにぶい黄褐色 (Hue10YR7/4) を呈する。厚さ5.3mm。

12は壺の底部。内外面は橙色 (Hue10YR7/6) を呈する。破片が小さく厚さは不明。

13は杯で回転条切りの底部がみられる。器面の剥落が多い。

14・15・18は同一個体であろうか。外面は橙色 (Hue10YR6/6) にぶい黄褐色 (Hue10YR7/4) を呈する。厚さは3.2mmと薄い。

16は内面黒色の杯片、17は破片が小さく詳細がわからない。

19と20は面的調査区から検出された。同一個体の可能性がある。内外面は橙色 (Hue10YR6/6) を呈する。厚さ5.7mm。壺の破片であろうか。

第4章 清水東遺跡

第1節 調査の方法

調査対象地は国道18号の北東側で幅約7m、長さ約97mの拡幅部にあたる。畑地として利用されており、調査対象地の中央部には畑への進入路が設置されていた。国道は盛上により造成されており、調査区との比高差は約2～3mある。安全確保と掘削上の置き場所確保のため国道から約5m離し、平行して、幅約1m、長さ約33mの北トレンチと約22mの南トレンチの2か所を設定した。トレンチ内で遺構が確認された場合には進入路を付け替え、調査をおこなうこととした。バックホーを使用して、耕作土、黒色土、漸移層を除去しローム層の上面まで掘削をおこなった後、人力で両刃鎌や移植ごてを使用して遺構、遺物の検出をおこないながら掘り下げた。遺構、遺物は検出されなかった。旧石器時代の確認のためトレンチ内に4～5mおきに1m×2mのテストピット(北トレンチ TP1～TP7 南トレンチ TP8～TP12)を設定し、人力で掘り下げた(第5図)。

第2節 層序

清水東遺跡の調査区の層序は以下のとおりであり、I～IV層はこれまでの基本層序に対応する。

- I層：Hue10YR1.7/1、黒色シルト。植物根非常に多い。粘性普通、締りよい～なし。表土、現耕作土。
- II層：Hue10YR1.7/1、黒色シルト。表土よりやや黒色味が強い。粘性ややあり、締り普通。
- III層：暗褐色漸移層（II層とIV層の漸移層）、上部はHue10YR2/1～Hue10YR3/3、黒色～暗褐色シルト、下部はHue10YR4/2～Hue10YR7/6、灰黄褐色～明黄褐色シルト。粘性ややあり、締り普通。
- IV層：Hue10YR5/6、黄褐色ローム。粘性あり、締り普通。
- 1：Hue10YR6/1～5/1、褐灰色極細粒砂質火山灰。白色粒子（細～中粒）を含む。粘性なし、締りよい。IV層中はダンゴ状、2層中ではレンズ状に連続する。簡易的に水洗、顕微鏡観察をおこなったところ、パブルウォールタイプのガラスが30～40%を占め、有色鉱物はほとんど含まれず、石質岩片のうち白色系岩片が50～60%であった。ガラスの屈折率は未計測であるが、形状からA Tの可能性が非常に高い。ただし降灰したものか、再堆積したものかは不明である（分析方法、結果は別に記載する。）。
- 2：Hue10YR7/4、にぶい黄褐色砂質シルト。粘性普通、締り普通。白色粒子（細～中粒）を全体に目立って含む。
- 3：Hue10YR7/4、にぶい黄褐色シルト。粘性あり、締り普通。白色粒子（細～中粒）を少量含む。暗褐色斑紋（径1.5cm以下）を含む。
- 4：Hue7.5YR7/4、にぶい黄褐色シルト。粘性普通、締り普通。暗褐色斑紋（径2cm以下）を目立って含む。
- 5：Hue10YR8/3～7/4、浅黄橙～にぶい黄褐色シルト。粘性あり、締り普通。暗褐色斑紋（径1.5cm以下）を少量含む。
- 6：Hue10YR6/4、にぶい黄褐色砂質シルト。粘性普通～ややなし。締りややよい。暗褐色斑紋（径1.5cm以下）全体に散る。
- 7：Hue10YR4/1～5/1、褐灰色粘土質シルト。粘性あり、締りよい。明黄褐色スコリア（径1cm以下）

をわずかに含む。上部1～2cmはHue10YR5/8 明黄褐色のリモナイト集積あり。

- 8-1: Hue10YR4/1、褐灰色シルト。粘性あり、締りよい。明黄褐色スコリア（径1.5cm以下）を目立って含む。
- 8-2: Hue10YR8/2～8/3、灰白～浅黄橙色砂混じりシルト。粘性あり、締りよい。明黄褐色スコリア、赤紫色スコリア、灰色岩片（径7mm以下）を全体に含む。白色粒子（中粒）を全体に含む。植物根痕跡が全体にみられる。
- 9-1: Hue10YR8/2、灰白色砂混じりシルト。粘性あり、締りよい。上部2cmに明黄褐色のリモナイト集積あり。白色砂粒を全体に含む。
- 9-2: Hue10YR8/2、灰白色砂混じりシルト。粘性あり、締りよい。上部2～5cmに黄褐色のリモナイト集積あり。白色砂粒を全体に含む。
- 各テストピットでの観察を記載する。

TP1

地表から1.48mまで掘り下げた。IV-1層（南）：砂混じりシルト、IV-1層（北）：明黄褐色シルト、IV-2層：ぶい黄褐色シルト、5層：浅黄橙色シルト、6層：ぶい黄橙色砂質シルト。

6層から一部さらに約20cm掘り下げたところ、円礫混じりの砂層（粘性なし、締り非常によい）が堆積していた。IV層～5層は土質や色調から水際に堆積したと考える。6層以下は水成堆積であるが、基本層序での層位は不明である。

TP2

I層、II層、III層、IV層、2層を確認した。2層の上部、IV層との境付近でダンゴ状の1層を確認した。IV層以下は水つきでの堆積と考えられる。

TP3

I層、II層、III層、IV層を確認した。テストピット底部、IV層中でダンゴ状の1層を確認した。IV層以下は水つきでの堆積と考えられる。

TP4

地表から0.86m掘り下げた。I層、III層、IV層、2層、3層、4層を確認した。2層以下はぶい黄橙色の砂質シルト～シルトである。水つきでの堆積と考えられる。IV層中と2層中にダンゴ状の1層を確認した。

TP5

I層、IV層、2層、3層、4層を確認した（II層、III層は欠如）。IV層以下は水つきでの堆積と考えられる。2層の上部、IV層との境付近と2層中でダンゴ状の1層を確認した。

TP6

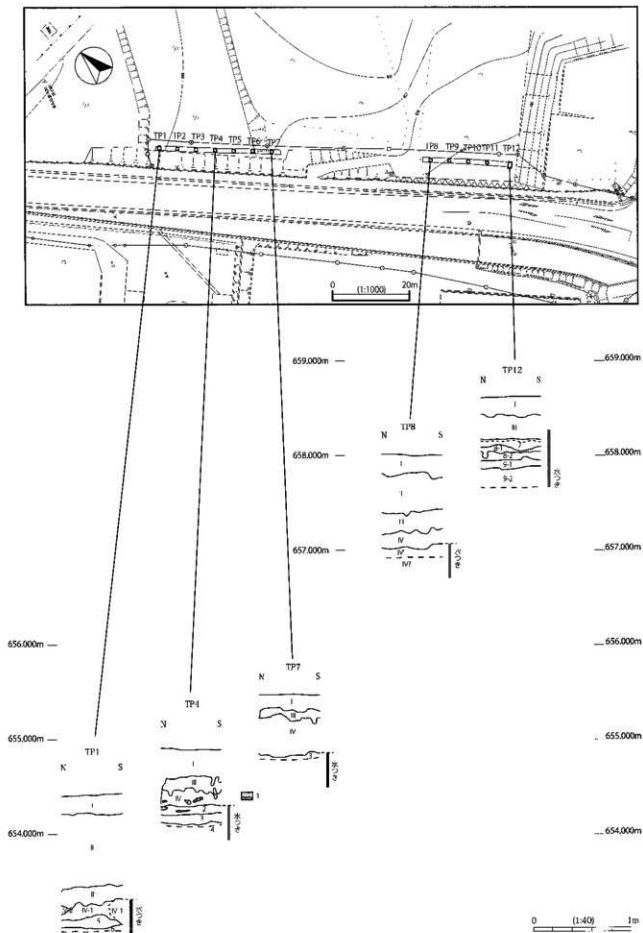
I層、III層？、IV層、2層を確認した。IV層は下部ほど粘土質になり、色調もぶい黄褐色へ漸移的に変化する。2層の上部、IV層との境付近でダンゴ状の1層を確認した。

TP7

地表から0.7m掘り下げた。I層、III層、IV層、3層を確認した。

TP8

地表から1.1m掘り下げた。I層、II層、III層、IV層を確認した。ここでのIV層は黄褐色シルトで他のテストピットと比較して色調、土質から最も風成層に近い。IV'層はIV層よりやや締りがある。IV'層はテストピット底部より20cm下位で色調が白っぽくなる。8層に相当するかまたは溶脱したかである。IV'層より下位は水つきでの堆積と考えられる。



第12図 清水東遺跡の層序

TP9

I層、II層、III層を確認した。IV'層?はリモナイトの集積のため黄褐色～明黄褐色と明るい。IV'層より下位はIV～VI層に相当する時期に堆積したと推定されるが、TP10、TP11、TP12の状況から再堆積の可能性が考えられる。IV'層より下位は水つきでの堆積と考えられる。

TP10

I層、II層、III層を確認した。III層より下位にはふい黄褐色砂混じりシルトで、橙色スコリアや砂礫粒、植物根の痕跡も含まれる。III層下部より下位は、TP11、TP12と同様で水つきの再堆積の可能性はある。

TP11

I層、II層、III層、7層、8層を確認した。III層下部より下位はTP12と同様で水つきの再堆積の可能性がみられる。7層の上部は黄褐色リモナイト集積がある。

TP12

地表から1m掘り下げた。I層、II層、III層、7層、8層、9層を確認した。III層下部より下位は水つきで、再堆積の可能性はある。7層、8層、9層は上部に黄褐色のリモナイトの集積がみられる。

以上のテストピットでの観察から清水東遺跡の調査地区は基本層序IV層以下またはIII層下部以下は水成層からなることが観察された。国道18号をはさんだ南西側の小古間での地質調査によれば、IV層下部に確認されるAT堆積以降も水成層(砂層～シルト層)であった⁽⁹⁾。今回の調査地区ではATは確認されていないが、南西側と同様の堆積状況から、今回の調査地区より北東側にあたる石器が採集された地点方向へ向かって次第に離水していく堆積環境にあったと思われる。

IV層中、2層中に含まれるダンゴ状の火山灰層(1層)について

層位を明らかにするために火山灰の砂粒組成分析をおこなった。

A 分析方法

テストピット4において肉眼で認定できる火山灰試料(上・下)を採取した。採取した試料について水洗「わんがけ」(野尻湖火山灰グループ1980)、風乾、篩分け(1/2・1/4・1/8mmの標準篩を使用)、をおこなった。なお水洗では超音波洗浄を使用せず、脱鉄処理や過酸化水素処理はおこなわなかった。

1/4～1/8mm径の砂粒について、野尻湖火山灰グループ(1980,1984,1989)の方法により砂粒組成をもとめた。区分した砂粒種は、各鉱物・火山ガラス・白色系岩片・黑色系岩片・赤色系岩片・カルメ岩片(黒色あるいは暗褐色～褐色で半透明・不定形の砂粒で、スコリア質火山岩の岩片と考えられるもの)である。

B 分析結果

・IV層中火山灰(火山灰上)

褐色極細粒砂質火山灰。白色系岩片>パブルウォールタイプの火山ガラスで、黑色系岩片、赤色系岩片、長石をわずかに含む。またシソ輝石、普通輝石、角閃石、黒雲母をごくわずかに含む。

・2層中火山灰(火山灰下)

褐色極細粒砂質火山灰。白色系岩片>パブルウォールタイプの火山ガラスで、黑色系岩片、赤色系岩片、長石をわずかに含む。またシソ輝石、普通輝石、角閃石をごくわずかに含む。

野尻湖の湖底ボーリング試料NJ88の分析結果(野尻湖火山灰グループ,1993)と比較して砂粒組成から最も近いものはヌカI火山灰(AT)である。ただし火山ガラスの屈折率が未測定であるため決定ではない。また火山灰上・火山灰下とも類似した砂粒組成であり、「火山灰下が降灰したもので、火山灰上が再堆積したもの」か「両者とも再堆積したもの」の両方の可能性がある。

今回の清水東遺跡での観察では明確なV層は確認できなかった。しかし、ATもしくはATの再堆積が確認されたことから、少なくとも2層はIV層に含まれるであろう。またそれ以下は水成堆積であり、遺構・遺物の確認は難しいことも分かる。

註

註1) 中村由克氏のご教示による。



南トレンチテストピット掘り下げ作業風景



遺構測量支援システムによる測量風景

第5章 総括

野尻湖の西から南に広がる丘陵地帯は旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡が密集する野尻湖遺跡群として知られている。その広がりには北西-南東方向約6km、北東-南西方向約4kmの範囲となっているが、今回発掘調査をおこなった人道下遺跡と清水東遺跡は野尻湖遺跡群の南限付近に位置している。

大道下遺跡の今回の調査区は旧石器時代のブロックが確認された2007年度調査区と同一地形面で、約100m離れている。そのため、旧石器時代のブロックが存在する可能性が考えられた。しかし、今回の発掘調査で旧石器時代の遺構・遺物は検出されなかった。旧石器時代遺物包含層の上部は造成により削平されていたが、野尻湖第Ⅰ期から第Ⅳ期(第8図)に該当する時期の地層は残されていたため、該当時期の遺構はなかったと判断できる。1996年度におこなわれた第4次調査(第1図1996年度調査区)で平安時代の竪穴住居跡が3軒検出されている。信濃町内では七ツ栗遺跡、針ノ木遺跡、東裏遺跡(長野県埋蔵文化財センター2000)など数軒の竪穴住居跡により構成される小規模集落が存在し、大道下遺跡も同様の類型として位置づけられる。今回の調査区の多くで縄文時代以降の遺構・遺物が包含される地層は造成により削平されていた。造成土から少量の土器片が検出されたが、竪穴住居跡等の分布域であったとすればもっと多くの遺物が検出されたと考えられる。そのため、今回の調査区は平安時代の小規模集落の中心からはずれた縁辺部であったと位置づけられる。

清水東遺跡ではⅣ層以下が水成堆積であることが確認された。そのため、旧石器時代には水底あるいは水辺で居住に適さないことがわかった。縄文時代以降の地層は風成となるため、離水したことがわかるが、まだまだ水辺に近い低い土地であったため、居住に適さなかったようだ。今回の調査区は遺跡の縁辺部にあたり、中心は北東側の小高い土地にあると考えられる。

貫ノ木遺跡や仲町遺跡、上ノ原遺跡など野尻湖遺跡群の中心にある遺跡では、今回の調査区や試掘調査をおこなった丘陵テラス部、裾部、頂部などの地形面には確実にブロックが存在し、多量の石器が包含されている。今回の調査の直前におこなわれた大道下遺跡と清水東遺跡の間の試掘調査では埋蔵文化財包蔵地ではないとされた(信濃町教育委員会2012)。ここを含めた大道下遺跡周辺は野尻湖遺跡群の中心付近の遺跡と比較して、明らかに遺構・遺物密度が低いことが確認された。今回の大道下遺跡の発掘調査と信濃町教育委員会が実施した試掘調査は今後、野尻湖遺跡群の分布域を考慮する上で重要な調査と位置づけられるだろう。

引用、参考文献

- 赤羽貞幸 1996 『野尻湖の生い立ちとその変遷』 『アーバンクボタ』 35
- 織笠 昭・野尻湖発掘調査団 1986 『長野県野尻湖遺跡群の編年と地域的梗概』 『日本考古学協会第52回総会研究発表要旨』
- 公文富士夫・河合小百合・井内美郎 2003 『野尻湖湖底堆積物中の有機炭素・全窒素含有率および花粉分析に基づく約25,000～6,000年前の気候変動』 『第四紀研究』 42-1
- 黒坂周平 1992 『東山道の実証的研究』
- 片沢比介・麻生優 1953 『北信、野尻湖底発見の無土器文化』 『考古学雑誌』 39-2
- 谷 和隆 2007 『野尻湖遺跡群における先石器時代石器群の変遷』 『長野県立歴史館研究紀要』 13
- 中村由克 1997 『旧石器時代遺跡の分布と立地』 『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』 第5号

- 中村由克 2010『旧石器時代における石斧の石材選択 とくに「蛇紋岩」とされた石材の再検討 -』『日本列島における農
素同位体ステージ3の古環境と現代人的行動の起源』予稿集
- 橋本勝雄 1995『関東東南部における後期旧石器時代前半期の石斧』『考古学ジャーナル』No.385
- 林茂樹、樋口昇一、森嶋敏、滝沢浩、小林淳、畑田充、北村直次 1970『杉久保A遺跡緊急発掘調査報告書』『長野県考古学会誌』
第8号
- 樋口清之・小林達雄 1964『長野県上水内郡信濃町伊勢見山遺跡』
- 信濃町誌編纂委員会 1968『信濃町誌』
- 信濃町立野尻湖博物館 1987『野尻湖博物館だより』
- 信濃町教育委員会 1994『丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 1997『大道下遺跡（第4次）ほか信濃町内遺跡発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2003『信濃町の遺跡分布図』
- 信濃町教育委員会 2008『平成19年度町内遺跡発掘調査報告書—大道下遺跡ほか—』
- 信濃町教育委員会 2012『平成23年度町内遺跡発掘調査報告書—辻屋遺跡ほか—』
- 長野県史刊行会 1982『長野県史 考古資料編全1巻（2）主要遺跡 北・東信』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 1994『県道11野島野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 一長野県中
野市内—』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 1997『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 一小平施町内・中野市内その1・
その2—』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 1997『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14 一中野市内その3・豊田村内—』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 1998『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2000a『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七
ツ栗遺跡・大平B遺跡 旧石器時代編』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2000b『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南
遺跡・上ノ原遺跡 旧石器時代編』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2000c『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器
時代編』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2000d『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 星光山荘A遺跡・星光山荘B遺跡・
西岡A遺跡・貫ノ木遺跡・上ノ原遺跡・大久保南遺跡・東裏遺跡・裏ノ山遺跡・針ノ木遺跡・大平B遺跡・日向林A遺跡・
日向林B遺跡・七ツ栗遺跡・菅井田遺跡 縄文時代以降編』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2000e『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2002『県単道路改良事業（一）古岡（仲）線埋蔵文化財 一信濃町内一 吹野原A遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2004a『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書2 貫ノ木遺跡・黒月
台遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2004b『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書3 仲町遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2004c『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書4 川久保遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2012『川野市柳沢遺跡 千曲川替佐・柳沢築塚事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 一中
野市内その3—』
- 長野県湖火山灰グループ 1993『野尻湖の湖底ボーリング試料NJ88の火山灰層』『地圏研報』41
- 野尻湖火山灰グループ 1996『第7号陸上発掘地、上部野尻湖層の火山ガラス含有層準の対比』『野尻湖博物館研究報告』第
4号
- 野尻湖火山灰グループ 2000『長野県・野尻湖西方の仲町丘陵に分布する上部更新統の砂粒組成』『野尻湖博物館研究報告』
第8号
- 野尻湖火山灰グループ 2001『新版 火山灰分析の手びき』地学団体研究会
- 野尻湖人類考古グループ 1980『野尻湖周辺の人類遺跡』『地質学論集』19
- 野尻湖人類考古グループ 1994『野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化』『野尻湖博物館研究報告』第2号
- 野尻湖人類考古グループ 1987『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅰ』野尻湖発掘の考古学的成果第1集
- 野尻湖人類考古グループ 1990『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅱ』野尻湖発掘の考古学的成果第2集
- 野尻湖地質グループ 1995『長野県北部信濃町針ノ木低地の地質層序』『野尻湖博物館研究報告』第3号
- 野尻湖発掘調査団 1975『野尻湖の発掘 1962-1973』共立出版
- 野尻湖発掘調査団 1980『野尻湖周辺の人類遺跡と古環境』『地質学論集』第19号

写真図版



国道18号野尻バイパス脇(仲町遺跡)に立つナウマンゾウ



野尻湖



遺跡遠景（南西より）



調査前風景（南東より）



テストピットの表土掘削（南東より）



テストピットの掘削（東より）



面的調査区の掘削（北東より）



面的調査区内のテストピット配置 (北東より)



TP1 断面 (東より)



TP2 断面 (北東より)



TP3 断面 (南より)



TP4 断面 (北より)



TP5 断面と遺物出土状況 (東より)



TP6 断面 (東より)



TP7 断面 (東より)



TP8 断面 (西より)



TP10 断面 (北より)



TP11 断面 (西より)



TP12 断面 (東より)



TP13 断面 (北より)



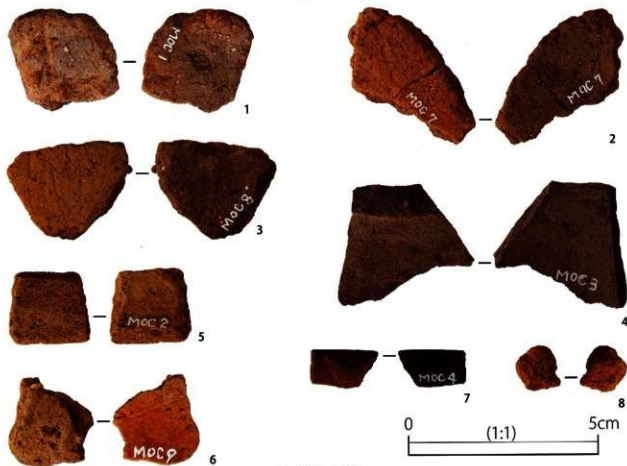
TP4 遺物出土状況 (東より)



SK1 完掘 (南より)



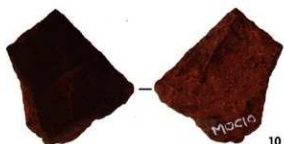
SK2 完掘 (東より)



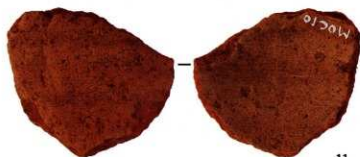
TP4 出土土器片



9



10



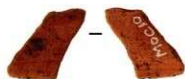
11



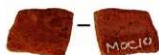
12



13



14



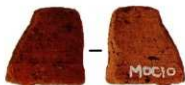
15



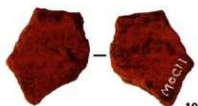
16



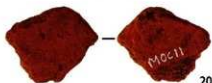
17



18

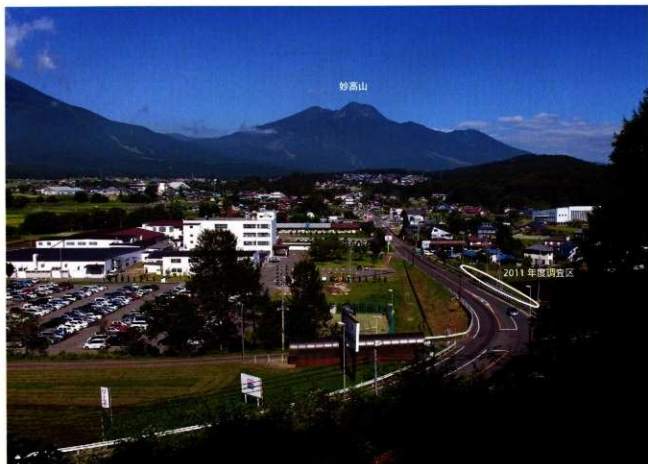


19



20





清水東遺跡遠景（南より）



調査前風景（南より）



トレンチ表土掘削（北より）



テストピット完掘（南西より）



TP1 断面 (南西より)



TP3 断面 (南西より)



TP7 断面 (南西より)



TP8 断面 (南西より)



TP10 断面 (南西より)



TP12 断面 (南西より)

報告書抄録

ふりがな	いっぽんこくどう18ごう (のじりばいばす) まいぞうふんかざいはくつちようさほうこくしよ							
書名	一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名	信濃町内その5							
巻次	5							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	108							
編著者名	谷 和隆 市川桂子							
編集機関	(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963・4 Ⅱ 026-293 5926							
発行年月日	2013年3月8日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大道下遺跡	長野県上水内郡 信濃町大字穂波 字大道下 1967 ほか	20216	146	36°	138°	20110801	510 m ²	一般国道18号 (野尻バイパス) 建設に伴う発 掘調査
				47'	13'	~		
18"	3"	20110930						
(世界測地系)								
清水東遺跡	長野県上水内郡 信濃町大字古間 1362-1 ほか	20216	90	36°	138°	20110801	630 m ²	
				47'	13'	~		
39"	9"	20110930						
(世界測地系)								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大道下遺跡	散布地	縄文時代	上坑2		縄文土器・土師器・須恵器			
	集落跡	平安時代						
清水東遺跡	散布地							
要約	<p>大道下遺跡は野尻湖から南へ約3kmに所在する。鍋山北西側の湧水地を中心とした丘陵の斜面に立地する。調査区は駐車場として利用されており中央付近は造成により黄褐色のローム層上部まで削平されていた。南部および北部は黒色土から縄文土器片、平安時代の土師器と須恵器片が検出されたが遺構は伴わなかった。SK1は柱穴状で時期は不明である。SK2は形状・規模から縄文時代の陥し穴の可能性が考えられるが、遺物が無い上に単独であることから特定には至らなかった。縄文土器片や平安時代の土師器・須恵器片が検出されたことから、国道西側で検出されていた縄文時代の遺物の分布域や平安時代の集落域が国道東側まで広がることが確認された。</p> <p>清水東遺跡は野尻湖から南へ約2kmに所在する。鳥居川右岸に立地する。調査区は畑地として利用されていた。調査区は遺跡の南部から北の鳥居川方向へ延びる浅い谷部に位置している。全域で黄褐色のローム層の水成堆積が確認され、水際の環境を示していることから、遺構、遺物は検出されなかったと考える。遺跡の中心は北側の微高地にあると予想される。</p>							

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 108

一般国道 18 号 (野尻バイパス) 埋蔵文化財発掘調査報告書 5

信濃町内その 5

大道下遺跡・清水東遺跡

発行 平成 25 年 3 月 8 日 発行
発行者 国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926
FAX 026-293-8157
印刷 葛友印刷株式会社
〒 381-8511 長野県長野市平林一丁目 34-43
TEL 026-243-2351
FAX 026-251-0001

